

府内城三ノ丸遺跡Ⅳ

—大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019

大分県立埋蔵文化財センター

府内城三ノ丸遺跡Ⅳ

－大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



1 車站遠景（東方向から）

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部施設整備課の依頼を受けて実施した大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う府内城・城下町の発掘調査です。

遺跡の所在する大分市は古代から現在に至るまで当地の政治、経済、文化の中心地としての役割を担ってきました。府内城は慶長二年（1597）に入封した福原直高の築城に始まりますが、その後万治元年（1658）の松平忠昭の入封により軍事・政治として発展し、明治時代を迎えるまでその機能が維持されます。

府内城を大きくみると、本丸、西ノ丸の本丸域と武家屋敷群が配置された三ノ丸で構成されています。本書で報告する発掘調査地点は三ノ丸の南部やや東側の位置にあたり、四家の武家屋敷があった場所と想定されています。調査では当時の屋敷区画に関連する遺構を発見し、また陶磁器・土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品などの遺物が出土しました。これらの資料は江戸時代の府内城・城下町の武家屋敷で営まれた生活や被災の一端を考えるうえで貴重な資料といえます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成31年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

- 1 本報告書は、大分県土木建築部施設整備課の依頼を受けて大分県教育委員会が平成29年度に実施した、大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う府内城・城下町の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は㈱イビソクに業務の一部を委託して実施した。
- 3 出土遺物の整理作業、実測・トレース・写真撮影は、大分県立埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で実施した。
- 4 出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。
- 5 本書で使用した地形図（1/25,000）は国土地理院作成のものを利用した。
- 6 本書の執筆・編集は、第4章以外をセンター企画普及課小林昭彦が担当した。
- 7 第4章近世府内城下町の火災については、大分県立高田高校の佐藤晃洋校長に原稿を執筆いただいた。記して感謝したい。
- 8 検出した遺構、出土遺物などの所見については、吉田寛氏（当センター調査第二課長）に全面的な協力を得た。
また、池邊千太郎氏（大分市教育委員会）から資料の提供や有意義な御助言をいただいた。

なお、本書の書名「府内城三ノ丸遺跡Ⅳ」は、県教育委員会がこれまで刊行した「府内城三ノ丸遺跡」（平成4年度）、「府内城三ノ丸遺跡Ⅱ」（平成5年度）、「府内城三ノ丸遺跡Ⅲ」（平成27年度）に続く連番とした。当該調査区の周知の埋蔵文化財包蔵地の名称は「府内城・城下町」である。府内城・城下町については大分市教育委員会が調査次数の整理を行っており、今回は第28次調査となる。

目 次

例言

第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	2
第4節 調査組織の構成	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	16
第4節 出土遺物について	34
第4章 近世府内城下町の火災について	39
第5章 総括	44

報告書抄録

挿図目次

第1図	府内城・城下町位置図	3
第2図	調査区位置図 (1/4000)	5
第3図	武家屋敷配置想定図	6
第4図	遺構配置図	8
第5図	調査区土層1 (西辺) 断面図	10
第6図	調査区土層2 (東辺) 断面図	11
第7図	遺構実測図 (1)	12
第8図	遺構実測図 (2)	13
第9図	遺構実測図 (3) -SD1-	14
第10図	溝・版築状遺構位置図	15
第11図	SX1、SK5・6 (1) 出土遺物実測図	21
第12図	SX6 出土遺物実測図	22
第13図	SK6・7 出土遺物実測図	23
第14図	SK7 出土遺物実測図	24
第15図	SK8・9 出土遺物実測図	25
第16図	SK10 出土遺物実測図	26
第17図	SK11・13・SD1 出土遺物実測図	27
第18図	SD1 出土遺物実測図	28
第19図	SD1 出土遺物実測図	29
第20図	SD1 出土遺物実測図	30
第21図	SD1 出土遺物実測図	31
第22図	SD1、SK14 出土遺物実測図	32
第23図	SD2、Pit1 出土遺物実測図	33
第24図	陶磁器・土器類編年図	35
第25図	府内城下町の町人町部分の概略図	40
第26図	寛保3年の大火による被災地域	41

表目次

表1	陶磁器・土器類観察表	36
表2	瓦類観察表	38
表3	土製品観察表	38
表4	石製品観察表	38
表5	金属製品観察表	38
表6	銅銭観察表	38
表7	18世紀から19世紀にかけて府内城下町及び周辺で発生した火災	39
表8	宝永7年 (1710) の府内城下町 (御曲輪内) の人口	40

写真図版目次

写真図版一	遺跡全景 (北方向から)
写真図版二	土層
写真図版三	SK1・2・4・5・6・8
写真図版四	SK12・14、SD1、Pit1
写真図版五	調査区南半部、SD2・5、遺物135出土状態
写真図版六	出土遺物1～18
写真図版七	出土遺物19～41
写真図版八	出土遺物42～63
写真図版九	出土遺物64～86
写真図版十	出土遺物87～103
写真図版十一	出土遺物104～120
写真図版十二	出土遺物121～131
写真図版十三	出土遺物132～146

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

県庁別館受変電棟増築工事に伴う府内城・城下町の発掘調査は平成29年6月5日～6月29日に実施した。この調査は平成29年2月6日に実施した当該地区の遺構確認調査で土坑や陶磁器類を確認したため、本調査に至ったものである。

調査地区は周知の埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下町」の中央部やや西寄りの府内城南側に位置する三ノ丸の一角にあたる。これまで当該地付近の調査は、平成3年4月～5月の県庁新庁舎（県庁新館）建設に伴う第1次調査、同年6月の本庁舎付帯施設建設に伴う第2次調査、平成27年1月～2月の県庁新館受変電棟新築工事に伴う第3次調査を実施した。今回の調査は当時の絵図から山田家・神家・伊川家・増田家など四家が存在したと想定される範囲が対象となったものである。

第2節 発掘作業の経過

発掘作業は、大分県立埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）が調査主体となって実施した。遺構埋土の掘下げ、実測作業、写真撮影などの支援業務については民間調査機関へ一括して委託する体制をとった。委託内容は、①重機による表土除去、②人力による遺構検出、③人力による遺構埋土掘下げ、④遺構等実測、⑤遺構写真撮影、⑥現場管理などであった。センターの職員（調査員）は調査区の設定、遺構輪郭の確認、遺構埋土の確認、遺構の構造や遺物出土状態を把握し、受注業者の調査技師に各工程ごとに技術的指導を行い調査精度の確保と調査行程の管理を行った。

（調査行程の概要）

平成29年6月5日（月）	重機による表土除去作業開始
6月6日（火）	コンクリート殻の除去作業開始 調査区北部の表土除去終了区域から遺構検出作業開始
6月9日（金）	重機による表土及びコンクリート除去作業終了 調査区西辺の土層断面の記録作業実施
6月12日（月）	遺構検出作業終了 遺構埋土の掘下げ作業開始
6月13日（火）	遺構実測・写真撮影開始
6月27日（火）	調査区全景写真撮影実施
6月28日（水）	遺構埋土の掘下げ作業終了
6月29日（木）	遺構実測・写真撮影終了
6月30日（金）	調査区の埋戻しを実施 発掘調査を完了

第3節 整理等作業の経過

整理作業は、基礎作業と資料作成を一括して依頼し、作業場所をセンターとして実施した。委託内容は、①遺物洗浄、②遺物注記、③遺物接合、④遺物復元の4工程(前半工程)、⑤遺物実測、⑥遺物拓本、⑦遺物観察表基礎データ作成、⑧遺物実測図トレース、⑨遺物写真撮影の5工程(後半工程)及び遺物取出、遺物区分・整理遺物収納、整理作業施設の清掃等(諸作業)の各作業であった。センター職員は、遺構図版・遺物図版の作成、遺構及び遺物写真図版の作成、原稿執筆、編集作業を行った。

整理作業は対象箱数30箱を対象として実施し、平成30年6月5日から平成30年8月31日の期間に遺物洗浄から遺物実測図トレースの各作業を行った。

報告書作成は図版作成、原稿執筆を9月1日から開始し、12月25日に終了した。

入稿は12月25日に行い、初稿を平成30年12月21日に受領した。

平成31年2月28日に校了

＊ 3月29日に報告書納品

第4節 調査組織の構成

平成29年度

埋蔵文化財センター	所長	阿部辰也
	副所長(兼調査第一課長)	江田 豊
	総務課長	神田 繁
	総務課副主幹	石丸一輝
	総務課主事	堺井裕史
	調査第一課主査	横澤 慈
	企画普及課専門員	小林昭彦

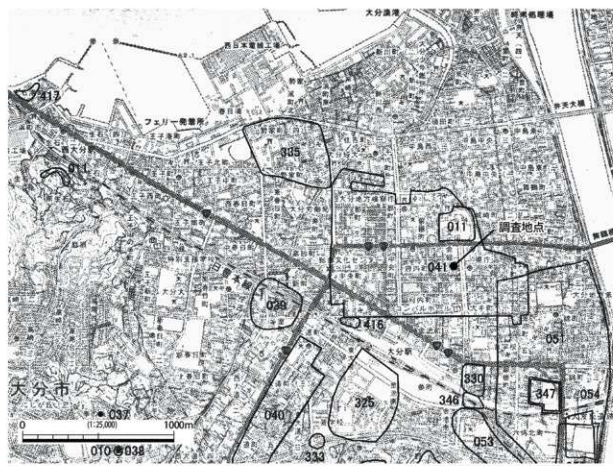
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分市は大分県中央東部に位置し、北側は瀬戸内海の最も西部の別府湾に面する。海岸に面する一帯に大分平野が広がり、中央部を大野川が北流し、西部は大分川が東流し、後に北流して別府湾に至る。大分平野周辺の地形は西部を高崎山火山地と称される旧期火山が標高600m級でそびえる。南部は大野山地の北端を構成する霊山山地、東部は佐賀関山地など400m～800m級の山地が形成されている。一方で山地は谷の開析が進み、谷底の小規模な平野がみられる。大分平野はこのような丘陵や台地に囲まれ、二つの河川によって河岸段丘が発達し平野部を形成している。さらにその河口部には三角州が展開し、大分市街地や鶴崎市街地は三角州上に形成されている。大分市の市街地は大分川河口部に広がっており、府内城・城下町はその中心部に位置している。

第2節 歴史的環境

江戸時代の大分県は幕末時点で、北から中津藩（奥平氏10万石）・日出藩（木下氏2万5千石）・杵築藩（能見松平氏3万2千石）・府内藩（大給松平氏2万2千石）・臼杵藩（稲葉氏5万石）・佐伯藩（毛利氏2万石）、西部では岡藩（中川氏7万石）・森藩（久留島氏1万3千石）の8藩が小規模な領国を支配しており「小藩分立」の状況を呈していた。府内藩（大分市）は8藩の中でも石高の少ない藩であったことが窺える。

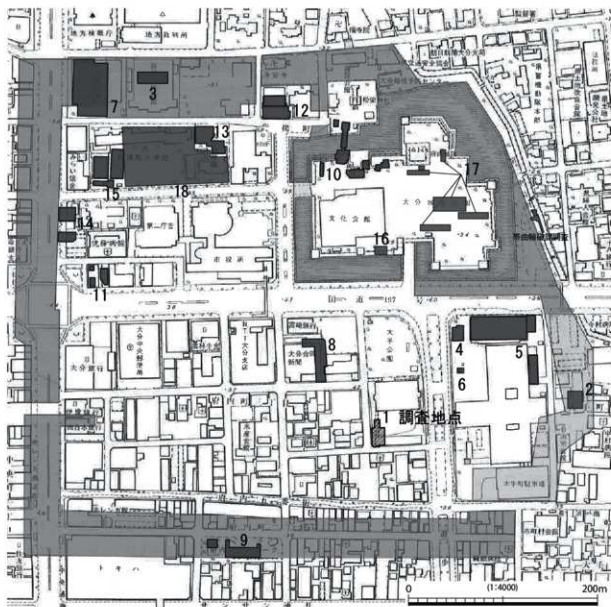


第1図 府内城・城下町位置図

府内城と城下町は、慶長二年（1597年）豊臣秀吉の命を受け白杵藩から入封した福原直高の築城に始まり、徐々に創られていく。直高は別府湾に面する「荷落」の場所を築城地に定めた。慶長四年、二ノ丸・東三重櫓・三ノ丸家臣屋敷が完成した。地名を「荷揚」に改めるとともに城を「荷揚城」と称した。直高は白杵時代の6万石に大分・速見・玖珠3部の加増を合わせた12万石の城主となったため、石高に応じた城の規模となったとされる。その後、竹中重利が慶長六年（1601年）に入封し城郭の主要施設と城下町の建設に取り掛かった。慶長七年（1602年）には天守閣・桜櫓・門・三ノ丸・堀・山里丸・三ノ丸に入る東西北の入口などが完成、町屋48を配置したとされる。慶長十年には城下町が完成。城下町全体を囲む外堀が南北は八町十九間（約950m）、東西十町三十五間（約1210m）の規模で掘削された。このように城下町は方形を基本とした縄張りで侍屋敷と町屋が分離され、堀で囲まれた近世城郭都市の景観を現した。竹中氏滅亡後、日根野氏が入封するが一代で断絶。幕府直轄を経て、松平忠昭が万治元年（1658年）の入封以降安定する。18世紀代は大火や地震でたびたび被災する。なかでも、寛保三年（1743年）の大火は城郭の施設や城下町の大半を焼き尽くすという壊滅的な被害を与えた。明治まで続いた大給松平氏の治世は被災と復興の中で継続したといえる。一方でその歴史が地下に痕跡として残されているのである。

府内城に関する発掘調査を概観したい。これまでの発掘調査は18箇所で行われており、このうち、11箇所は三ノ丸の範囲内に所在する。調査主体は1～7が県教育委員会、8～18は大分市教育委員会が実施した。1は今回の調査地点である。四家の家臣屋敷内と想定した。4は平成26年度、県庁新館受変電棟新築工事に伴う発掘調査を実施し、火災処理土壌を確認した。5は平成3年度の県庁新館建設に伴う発掘調査。4・5ともに武家屋敷（木村家）跡である。6は平成5年度に発掘調査を実施した木戸家の屋敷、4・5の南にあたる。3は平成29年度の知事公舎建設に伴う発掘調査、堀の一部であることがわかった。2は平成30年度の県庁駐車場建設に伴う発掘調査で、中堀東辺を示す可能性のある堀の一部が確認されている。今後、中堀の構造を考えるうえで貴重な発見といえる。7は平成6年度の大分中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う発掘調査、三ノ丸北口の施設の構造が明らかとなった。8・9はともに平成5年度に調査である。8は大分合同新聞社屋建設工事に伴う調査、溝状遺構・井戸・土坑などが確認された。出土した陶磁器類は17世紀後半～19世紀とされる。遺構の配置から17世紀初頭の区画を示す可能性が指摘されている。9は公園整備に伴う発掘調査、三ノ丸の南辺を画す中堀の中央部が調査地点となったもので堀内から陶磁器類や漆器類・曲物・下駄など木製品が出土し、当時の日常生活を知る一助となった。10は平成7年度に大分市の府内城再発見事業の一環として実施された廊下橋の復元、周辺整備に伴う発掘調査である。17は平成29年度に大分市が実施した府内城大分城址公園整備事業に伴う発掘調査であり、城中枢部の状況など新たな事実が明らかとなった。14は平成10年度に民間開発に伴い発掘調査が実施された。三ノ丸西部地区の府内城築城時の整地層とその下層に戦国時代の遺構が確認された。12は平成17年度に実施された大分市保健所建設整備事業に伴う発掘調査である。調査の結果、「府内絵図」に記載された北ノ丸西側の石垣・堀が確認された。13は平成18年度の駐車場建設に伴う発掘調査。三ノ丸北部の当時の海岸線付近にあたる。18世紀後半の火災処理土壌が確認された。11は平成19年度に実施された民間開発に伴う発掘調査で、17世紀～19世紀代の掘立柱建物などがみられた。15は平成23年度に大分市立荷揚町小学校屋内運動場改築工事に伴う発掘調査が実施された。19世紀代の遺構から「手嶋」・「上原」の文字を記した磁器が出土しており、絵図に記載された武家屋敷の居住者の特定や火災に伴う建て替えの状況など新たな知見が得られている。

平成29年度には武家屋敷と府内城の大分市による調査が実施された。18は平成23年度調査地区15の東隣接地となる荷揚町小学校跡地の発掘調査で多くの知見が得られている。この地区は府内城三ノ丸の中でも城に近く、家老や奉行クラスの上級武士が居住した屋敷にあたる。検出された遺構は屋敷境の礎石

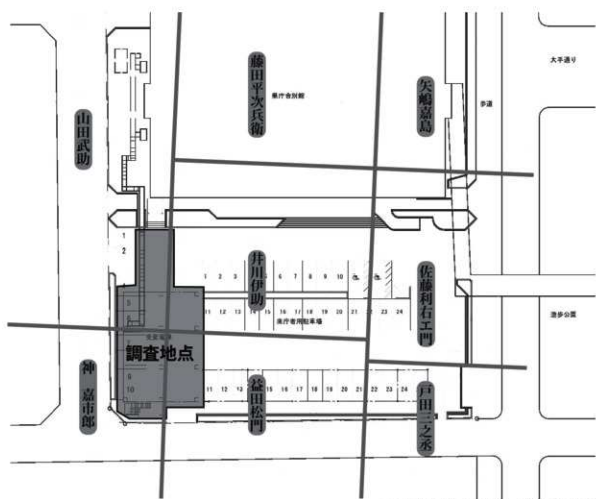


番号	調査の内容	遺跡の概要	調査回数	調査主体者
1	大分県庁館受電電線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	28次	大分市教育委員会
2	公用車等駐車場内配線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	中層	31次	
3	知事公舎建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	中層	30次	
4	大分県庁新館受電電線新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷(木村家)	25次	
5	大分県民同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷(木村家)	13次	
6	大分県民同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷(木村家)	23次	
7	大分県中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	堀・石垣・櫓・三ノ丸北口	33次	
8	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	43次	
9	公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	中層	53次	
10	公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	西ノ丸・廊下橋、周辺建物	63次	
11	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷(森下邸・淨安寺)	103次	
12	大分市保健所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	北ノ丸・堀	163次	
13	市営荷揚町中央駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	173次	
14	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷・道路	183次	
15	大分市立荷揚町小学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷・道路	193次	
16	中門橋の確認調査	堀内堀内	263次	
17	大分城址公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	堀内堀内	273次	
18	大分市開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	293次	

第2図 調査区位置図 (1/4000)

列・建物基礎・井戸・地下蔵・土坑などであり、武家屋敷三軒であることが判明した。出土遺物には陶磁器類やキセル・かんざしなどの金属製品、下駄・はしなどの木製品など様々な生活用品がみられ。江戸末期の武士の生活が再現できる。また、屋敷内の井戸から鍋島焼の皿の破片が出土した。鍋島焼は將軍家への献上品や大名家への贈答品として作られており、一般に流通するものではない。府内藩の武家屋敷での出土はその経緯が課題となった。17は府内城跡の予備的な調査とはいえ、本丸南東の内々堀、東ノ丸と本丸にかかる廊下橋、天守台につながる二階取付槽と渡槽などの城中枢部の構造など新たな事実が明らかとなった。今後の調査や保存・整備の方向性に係る大きな成果があったといえよう。

今回調査を実施した地点は6に最も近い武家屋敷の一画にあたる。



◎「豊後府内藩御家中名前付（部分）」文久三年（1863）より

第3図 武家屋敷配置想定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

今回の発掘調査は292㎡を対象として実施した。調査地区は周知の埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下町」に位置し、府内城の三ノ丸に該当する。調査の対象となった地区は、県庁別館敷地内の南西側、旧駐車場にあたる。当該地の状況は、確認調査の調査所見のとおり近代以降の造成や建物基礎によって近世の生活面が大きく損なわれていることがわかった。このため、近世武家屋敷の内容を明確にすることは困難な状態であった。

第2節 遺構

本調査区では、近世～近代の遺構として土坑(SK)14、落込み(SX)1、柱穴(Pit)1、溝状遺構(SD)5を検出した。

基本層序は調査区西壁(土層1)と東壁(土層2)の2箇所を観察した(第5・6図)。現代のアスファルト面から近現代、近世の堆積を経て地山の砂層面まで約1.5mの深さがあった。堆積していた土層は37層であった。

西辺部南北方向の土層1では、地表下1m～1.3mまでは近現代の造成(3層～7層)、上層(1層・2層)は現在の造成・建物基礎に伴う掘削や構造物が顕著にみられた。近世に属する層は西辺中央部の9層を確認できた。この層は硬質の砂性黒褐色土層で道路などの可能性があったが、調査区東辺の土層断面で確認できる版築状の土層と平面的には対応するもの0.5mほど低いため同時期の道路状遺構とすることは難しい。9層のやや北には焼土・炭灰とする10層を確認した。火災処理土坑の痕跡と考えた。この下層は地表下0.6mで地山の粘質黄褐色土層、灰褐色粗粒砂層であった。土層1では近代から現在までの造成などで近世の生活面を広がりとして確認できなかった。

東辺部南北方向の土層2では、地表下0.6m～1.3mまでは近現代の造成土や建物基礎がみられた。近世に属する層は東辺中央部の地表下0.8mの20層～27層と28層～33層の整地層を確認できた。このうち20層～25層は道路などの可能性が考えられた。ただ、西辺の土層断面で確認できた道路状堆積・溝とは位置的には対応するもの高さや連続する遺構とは判断できなかった。

このように、近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていることを示していた。したがって、近世の武家屋敷を構成した建物や施設など痕跡はほとんど確認できず、わずかに地山に達する深さで掘られた土坑、溝、一部の整地層などが調査の対象となった。

遺構(第7～第10図)は土坑13基、落込み1、ピット1、溝状遺構5である。このうち、土坑4基は近代の所産である。土坑の多くは廃棄土坑で、焼土や被熱した遺物から火災処理に伴うものと想定された。溝状遺構1条は屋敷区画に関連するものと考えた。

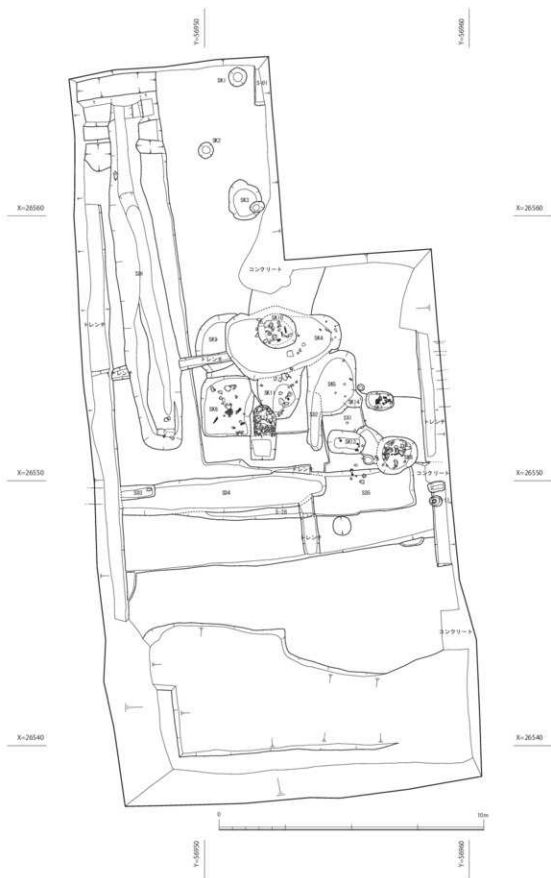
SK1は埋壺であった。径0.65m、深さ0.3mの円形土坑に壺が据えられていた。上部は消失していたが水甕の用途が想定された。SK2は埋壺であった。1m×0.9m、深さ0.25mの円形土坑に壺が据えられていた。上半部は消失しておいたがSK1と同様の用途が想定された。

SK3は1.5m×1.2mの円形土坑であった。

SK4～SK15は17世紀～幕末に設けられた近世の土坑(井戸を含む)である。調査区中央部に多くが重複した状態で確認した。

SK4は4.5m×2.3m、深さ0.2mの円形土坑であった。土坑内には焼土や炭灰を主体とする堆積土を確認した。

SK5はSK4のほぼ南に位置していた。規模は2.5m×1.5m、深さ0.25mの不整形を呈していた。土



第4図 遺構配置図

坑内には焼土や炭灰を主体とする堆積土を確認した。

SK6は調査区中央部にSK12と接した状態で確認した。規模は2.3m×2m、深さ0.35mの方形を呈していた。土坑内には黄褐色を基調とする堆積土を確認した。土坑内から幕末～近代の陶磁器類が出土した。「大坂新町大笹紅」銘の紅皿3点を確認した。

SK7は調査区中央東側に位置していた。規模は2.5m×1.5m、深さ0.25mの不整円形を呈していた。土坑内には上層に遺物の堆積がみられた。

SK8は西壁を欠くが規模は長さ約1.6m、幅0.9m、深さ0.6mの不整円形を呈していた。土坑内に陶磁器類の堆積を確認した。

SK9はSK4の西に位置していた。東壁はSK4に切られていた。規模は長さ2.5m以上、最大幅は2m、深さ0.2mの不整円形を呈していた。黄褐色土の堆積を確認した。

SK10はSK4と重複していた。径1.3m～1.5mの円形を呈していた。底面は1.5mまで掘り下げたが確認できなかった。これ以上の掘下げ作業は湧水のため、断念した。遺構の形状から井戸と推定した。

SK11はSK4の南に位置していた。北壁はSK4に切られていた。規模は長さ2.5m以上、最大幅は1.7m程度、深さ0.4mの不整円形を呈していた。堆積土中に陶磁器類の破片が含まれていた。

SK12はSK6の東側に位置していた。南辺を後世の土坑で切られていたが、形状は確認できた。規模は長さ1.1m以上、最大幅は0.9m、深さ0.2mの不整円形を呈していた。堆積土に礫や陶磁器類が含まれていた。

SK13はSX1と重複していた。規模は長さ1.5m以上、最大幅は0.9mの不整長方形を呈していた。

SK14はSK5の東に位置していた。西壁をSK5に切られていたが形状はほぼ確認できた。規模は長さ0.75m以上、最大幅は0.45m、深さ0.55mの楕円形を呈していた。黄褐色を基調とする堆積土を確認した。堆積土中から陶磁器類が出土した。

SX1は近世の土坑集中範囲のうち東南部に位置し、南北2m、東西1.6mの規模であったが南辺はSD5に切られていた。

Pit1は調査区東辺のほぼ中央に位置していた。径0.5mの円形を呈し、深さ0.3mであった。さらに、底面の中央部に径0.15m、深さ0.1mの窪みを確認した。

SD1は調査区のほぼ西辺に沿って南北方向に構築された溝であった。調査区北辺から南へ延びて南端は調査区はほぼ中央部に位置した。規模は、長さ13.5m、幅1m～2m、深さは遺構確認面から0.6m～1mほどであった。溝内の土層堆積状態は中央部(A-A')で上層から1混焼土・炭灰若干灰褐色土層、2黒灰褐色土層、3混焼土・炭灰多量黒茶褐色土層、最下層は4砂質黄黒褐色土層であった。堆積土中から陶磁器類等が出土した。SD1は位置的に武家屋敷の区画と関連する溝と想定した。

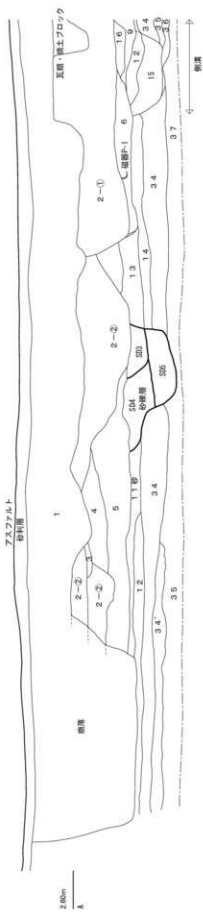
SD2は調査区のほぼ中央部に南北方向に構築された溝であった。溝の北半はSK5に切られていた。溝の規模は長さ3m、幅0.6mほどであった。

SD3は調査区西辺中央部から東方向に1.3mを確認した。土層1で観察すると、SD5の上部、SD4の北壁を切って構築されていた。幅0.6m、深さ0.2mの規模であった。

SD4は調査区西辺中央部から東方向に8mを確認した。土層1で観察すると、SD5の上部、SD3に北壁を切られて構築されていた。幅1.1m～1.3m、深さ0.35mの規模であった。溝内の堆積土は砂礫が主体であった。

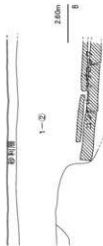
SD5はSD3・4と同様に調査区西辺中央部から東方向に調査区東辺付近まで延びていた。規模は長さ11m、幅0.8m～1.5m、深さ0.25mであった。

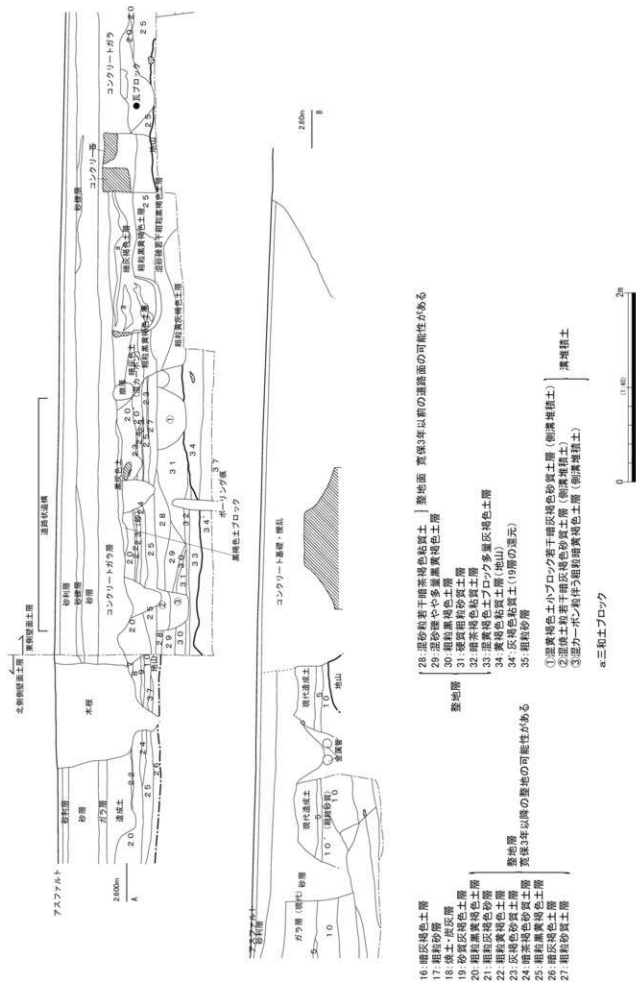
SD1～5は調査区西辺から東西方向に構築されており、調査区内では後世の造成などで大半を掘削されていたが、南北方向を区画するSD1に対して東西方向の区画に関する溝と想定された。



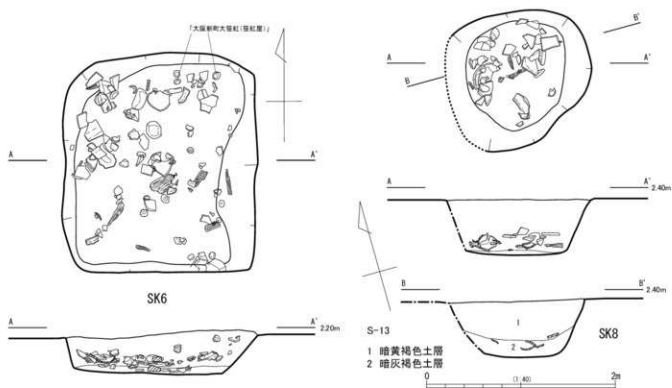
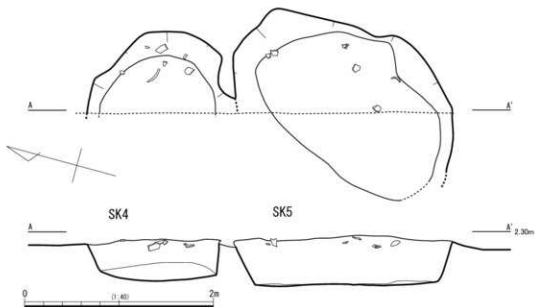
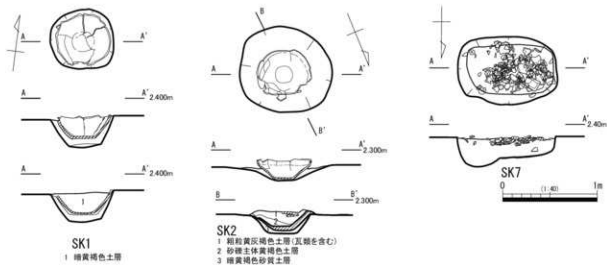
第5図 調査区土層 1 (西辺) 断面図

- ※1-2層: 現在の造成土
 3-7層: 近・現代の造成土
- 1-①: 現在の造成土(コンクリート盤、ブロックを含む)
 - 1-②: 混砂利、暗褐色土層
 - 2-①: 砂性暗褐色土層
 - 2-②: 混砂利、赤土粒、粗粒暗灰褐色土層
 - 2-③: 粗粒暗褐色土層
 - 3: 粗粒暗褐色土層
 - 4: 粗粒暗褐色土層
 - 5: 混砂利帯土、粗粒暗褐色土層
 - 6: 混砂利帯土、粗粒暗褐色土層
 - 7: 混砂利帯土、粗粒暗褐色土層
 - 8: 暗褐色土層
 - 9: 硬質砂性黒質褐色土層(運路状遺構の可能性)
 - 10: 混土層
 - 11: 10層の逆元

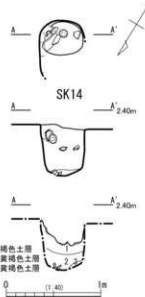
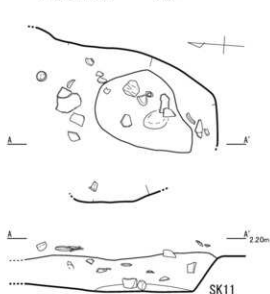
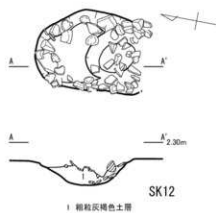
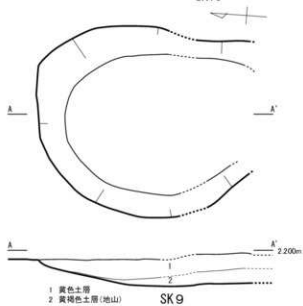
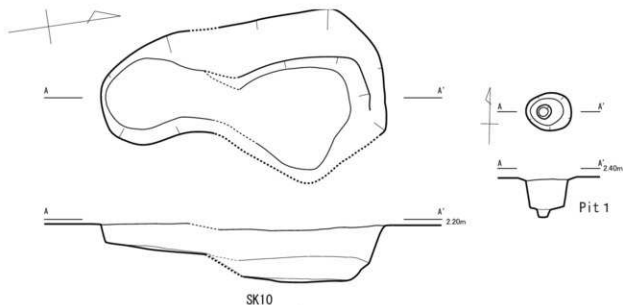




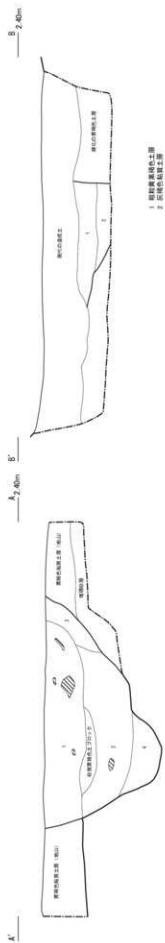
第6図 調査区土層2 (東辺) 断面図



第7图 遺構実測図(1)

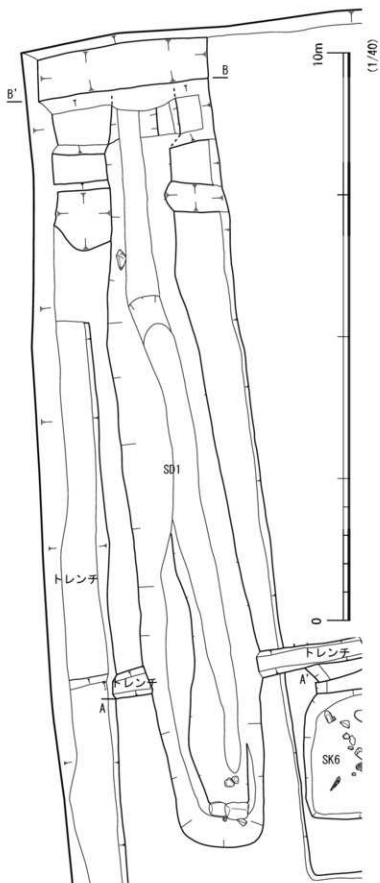


第8図 遺構実測図(2)



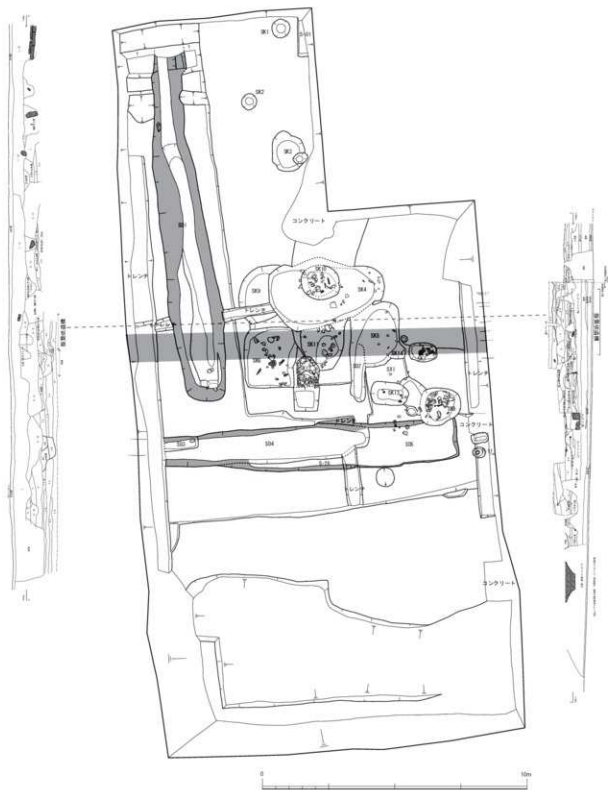
- 1 東山古墳 (M1)
- 2 東山古墳 (M2)

- 1 南側土、中土層 (M1)
- 2 南側土、中土層 (M2)
- 3 南側土、中土層 (M3)
- 4 南側土、中土層 (M4)



(1/40)

第9図 遺構実測図 (3) -SD1-



第10図 溝・版築状遺構位置図

第3節 遺物

遺物は土坑、溝、ピットからの出土品、表土中から採取したものを図示した。

以下、遺構ごとに説明を行う。

SK1（第11図1～3）1は肥前磁器染付皿である。口縁～底部が1/4～1/2残る。口径約12cm、器高2.6cm、底径7.2cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。2は肥前磁器で青磁染付碗で、筒形を呈す。口縁1/2と底部が残る。口径約8.6cm、器高6.5cm、底径4.1cmの大きさである。見込みにコンニャク印判の五弁花文をもつ。時期は18世紀後半～19世紀。3は丸瓦の完形品である。長さ25.5cm、幅12.4cm、厚さ1.6cmの大きさをもつ。

SK5（第11図4～7）4は景徳鎮系磁器碗、饅頭心碗である。底部が2/3ほど残る。見込みに花の文様、高台内に銘款「萬福取同」をもつ。時期は16世紀後半である。5は唐津系陶器碗である。径5.6cmの底部が残る。高台に胎土目痕3箇所がある。二次被熱がみられる。時期は1600年～1630年代。6は唐津系陶器皿である。口縁1/3、底部2/3が残る。口径約14.4cm、器高3.5cm、底径5.7cmの大きさである。高台に胎土目痕2箇所がある。時期は1600年～1630年代。7は銅銭であるが、錆化が著しく銭の種類を特定できない。

SK6（第11図8～14、第12図15～32、第13図33～40）8は肥前磁器染付碗である。3/4個体が残る。口径6.8cm、器高5.1cm、底径3.2cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。9は肥前磁器染付碗である。1/2個体が残る。口径約6cm、器高4.5cm、底径3.4cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。10は瀬戸美濃系磁器染付碗である。1/3個体が残る。口径約8.8cm、器高4cm程度と推定される。時期は19世紀前半～中頃。11は肥前磁器染付碗でいわゆる「くらわん碗」である。2/3個体が残る。口径約10.4cm、器高5.2cm、底径4.2cmの大きさである。時期は18世紀後半。12は瀬戸美濃系磁器染付碗である。口縁部が1/4残る。口径約9.2cmの大きさである。外面に「馨」が施されている。時期は19世紀前半～中頃。13は肥前磁器染付碗（端反碗）である。1/2個体である。口径約10.2cm、器高6.3cm、底径4cmの大きさである。時期は1820年～1860年代。14は肥前磁器染付皿である。口縁部を一部欠く。口径10.2cm、器高2.4cm、底6cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。15は肥前磁器染付皿である。2/3個体が残る。口径13.2cm、器高4cm、底径7.4cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。16は瀬戸美濃系磁器染付小杯である。3/4個体が残る。口径5.8cm、器高2.7cm、底径3cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。17は肥前磁器染付紅皿である。1/2個体が残る。口径7.6cm、器高2.7cm、底径2.8cmの大きさである。時期は18世紀後半～19世紀。18～21は肥前磁器染付紅皿である。18は口縁部付近を欠く。底部は径3.4cmの大きさである。外面に「大坂(新)町(お笹紅)」の文字がみられる。19はほぼ完形で口径7.4cm、器高3cm、底径2.4cmの大きさである。外面に「大坂新町お笹紅」の文字がみられる。20は口縁部1/2、底部が残る。口径7.4cm、器高2.9cm、底径2.8cmの大きさである。21は完形品で、口径9.4cm、器高4.3cm、底径3.4cmの大きさである。外面に「大坂新町お笹紅」の文字がみられる。時期は18～21ともに19世紀前半～中頃。22は肥前磁器染付碗の完形品で筒形を呈す。口径6.6cm、器高5cm、底径3cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。23は肥前磁器小杯で3/4個体を残す。口径6.7cm、器高5.1cm、底径3cmの大きさである。時期は18世紀～19世紀。24は肥前磁器染付仏飯器で1/2個体が残る。口径約7.1cm、器高4.9cm、底径3.8cmの大きさである。時期は18世紀後半～19世紀。25は関西系陶器急須とその蓋である。蓋は2/3個体が残る。口径4.8cm、器高2.6cmの大きさである。急須は口縁部、体部2/3が残る。口径5.8cm、器高10.5cmの大きさである。底部に墨書が確認できる。26は関西系陶器急須である。底部を欠く。口径6.2cm、現存高7.6cmの大きさである。27は関西系陶器の急須の蓋と同一個体の体部2/3、底部で1/5個体が残る。蓋は口径6.3cm、器高0.8cmの大きさである。急須の時期は19世紀前半～中頃といえる。28は関西系陶器土版で3/4が残る。口径5.4cm、器高8.5cm、底径5.5cmの大きさである。時期は19世紀前半～中

頃。29は関西系陶器土瓶の蓋で3/4が残る。口縁部外径9.7cm、器高2cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。30は関西系陶器土瓶の蓋で2/3が残る。口縁部外径7.5cm、器高1.7cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。31は関西系陶器土瓶の蓋でつまみを欠く。口縁部外径は5.4cmである。時期は19世紀前半～中頃。32は関西系陶器土瓶の蓋の完形品である。口縁部外径7.9cm、器高2.6cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。33は丹波系陶器播鉢で口縁部～底部の破片である。スリ目は5本1単位となっている。口径34.6cm、器高15.2cm、底径13cmの大きさを復元できた。時期は17世紀～18世紀。34は備前焼の播鉢で1/2個体が残る。スリ目は7本1単位となっている。口径約14cm、器高5.6cm、底径8.2cmの大きさである。時期は18世紀～19世紀。35は瓦質土器の火消し壺で4/5が残る。口径約16cmと推定できた。時期は19世紀前半～中頃。36は土鈴の破片で器壁は0.3cmと薄い。37は銅製煙管の雁首である。火皿の1部を欠く。現存長5cmである。38は寛永通宝、初鑄年1636年～1659年の古寛永である。39は劣化と錆化が著しく種類を特定できないが、寛永通宝の可能性がある。40は泥岩製の砥石である。長さ11cm、幅6cm、厚さ1.1cmの長方形を呈し、短辺の一辺が切断されている。使用面は表裏2面に確認できる。

SK7 (第13図41～43、第14図44～52) 41は肥前磁器染付角皿の完形品である。長さ11.9cm、幅4.5cmの大きさをもつ。皿の中央部に焼継ぎ痕が残る。時期は19世紀前半～中頃。42は肥前磁器の戸車の完形品である。直径5cm、孔径1.2cmの大きさをもつ。時期は19世紀前半～中頃。43は関西系陶器の急須である。口縁部～底部が1/4ほど残る。口径約5cm、器高7.2cm、底径6.7cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。44は関西系陶器の壺である。1/3個体が残る。口径9cm、器高11.2cm、底径7cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。45は陶器の甕である。2/3個体が残る。口径約14.8cm、器高17.7cm、底径8cmの大きさである。外面に鉄軸が施されており、軸だれがみられる。産地、時期は不明である。46は関西系陶器の土瓶である。4/5個体が残る。口径11cm、器高12cm、底径9.2cmの大きさである。時期は19世紀前半～中頃。47は関西系陶器の土瓶である。底部を欠き、口縁部～体部下端の1/2個体が残る。口径は10.4cmである。注口部内面の2箇所に孔が穿たれている。時期は19世紀前半～中頃。48～50は関西系陶器の蓋(行平鍋の蓋)である。48は1/2個体が残る。口径11.7cm、器高4.4cmの大きさである。49はほぼ完形品である。口径14.6cm、器高5cmの大きさである。50は1/2個体が残る。口径約13.4cm、器高4.5cmの大きさである。時期はともに19世紀前半～中頃。51・52は関西系陶器の鍋(行平鍋)である。51は把手を欠き、3/4を残す。口径約14.6cm、器高5cmの大きさである。底部内外面にスガが付着している。52は2/3を残す。口径12.5cm、器高7.2cmの大きさである。時期はともに19世紀前半～中頃。

SK8 (第15図53～62) 53は肥前磁器染付碗である。1/2個体が残る。口径約10cm、器高6cmの大きさをもつ。時期は1820年～1860年代。54は肥前磁器染付段重の蓋である。2/3個体が残る。口径12.1cm、器高4cmの大きさをもつ。時期は19世紀前半～中頃。55は関西系陶器皿のほぼ完形品である。口径約8.7cm、器高2.3cmの大きさをもつ。型打成形されている。時期は19世紀前半～中頃。56は関西系(清水焼系)陶器の急須のほぼ完形品である。口径7.8cm、器高7.8cmの大きさをもつ。注口部に通じる胴部の貫通孔が3個みられる。焼継ぎ痕が残る。時期は19世紀前半～中頃。57は関西系陶器の灯火具である。上部を一部欠く。器高約8cmの大きさをもつ。時期は19世紀前半～中頃。58・59は瓦質土器の鉢である。58は1/3個体が残る。口径37.8cm、器高12cm、底径26cmの大きさをもつ。59は1/2個体が残る。口径32.3cm、器高10.4cm、底径22.4cmの大きさをもつ。60は天草石の砥石の破片である。磨面は表面と側面の2面に確認できる。61は景興通宝、初鑄年1740年のベトナム銭である。62は寛永通宝(古寛永)で上部1/3を欠く。

SK9 (第15図63～65) 63は肥前磁器染付碗の体部～底部破片である。底径4.2cmの大きさをもつ。一重網目文と思われる文様が施されている。時期は1620年～1660年代。64は唐津系陶器(唐津焼)碗の

体部～底部破片である。底径4.7cmの大きさをもつ。65は瓦片を円盤状に二次加工したメンコである。径4.6cm、厚さ1.7cmの大きさである。

SK10（第16図66～76）66～69は唐津焼系陶器（唐津焼）皿である。66は1/2個体が残る。口径13.9cmの大きさをもつ。67はほぼ1/2個体で、口径13.4cm、器高3.8cm、底径5.3cmの大きさをもつ。68は口縁部の一部と底部が残る。口径13.9cm、器高3.5cm、底径5.3cmの大きさをもつ。69は口縁部～底部破片である。口径14cm、器高3.9cm、底径5.3cmの大きさをもつ。4点ともに内面に重焼きの痕跡がみられる。時期は17世紀前半（1600年～1630年代）。70は陶器皿（葉型）の破片である。産地、時期ともに不明である。71は絵唐津の破片である。16世紀末～1630年代。72は陶器、備前焼徳利の体部～底部の破片である。底部外面にヘラ記号が刻まれている。時期は16世紀末～7世紀前半。73は陶器播鉢の破片である。時期は16世紀末～17世紀前半。74は唐津焼系陶器播鉢の破片である。時期は16世紀末～1630年代。75は瓦質土器の壺である。口縁部と底部破片であるが同一個体と思われる。時期は17世紀前半。76は京都系土師器の皿1/2個体である。口径12.2cm、器高3.5cmの大きさをもつ。外面に指頭による成形痕が残る、底部は丸底を呈する。時期は17世紀前半。

SK11（第17図77～82）77～80は唐津系陶器の皿である。77は口縁部～体部破片で、口径は約26cmを復元できる。外面にススが付着している。時期は1590年～1610年代。78は溝緑皿の口縁部破片である。79・80は1/3～1/2個体が残る。底部に高台をもつ。大きさは77が口径12.4cm、器高3.9cm、底径5cm、78は口径13.8cm、器高3.5cm、底径5cmである。78～80の時期はともに1590年～1630年代。81は京都系土師器の坏で、口縁部2/3と底部が残る。口径10.4cm、器高4.2cmの大きさをもつ。外面に指頭による成形痕が残る、底部は丸底を呈する。時期は17世紀前半。82は瓦片を円盤状に二次加工したメンコである。径4.6cm～5.2cm、厚さ1.9cmの大きさである。

SK13（第17図83）肥前磁器染付紅皿の1/2個体である。口径6.6cm、器高2.5cm、底径3cmの大きさをもつ。時期は18世紀後半～19世紀。

SK14（第22図128～131）128は肥前陶器皿である。底部付近が残る。時期は17世紀前半。129～131は土師器坏のほぼ完形品である。129はやや小型で口径9.6cm、器高2.9cmの大きさをもつ。底部は丸く内湾気味に立ち上がる。130・131は丸い底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は短く外反する形態を示す。口径12cm前後、3cm前後の大きさである。131は被熱痕跡がみられる。時期は17世紀前半。

SD1（第17図84～89、第18図～第21図、第22図125～127）84は肥前磁器の青磁瓶である。口縁部～体部上半が残る。口径5.65cmの大きさをもつ。時期は18世紀～19世紀。85は肥前磁器染付碗である。口縁部2/3、底部が残る。口径10.1cm、器高5.6cm、底径4.1cmの大きさをもつ。外面の3箇所に田鶴文が描かれている。時期は1690年～1740年代。86は肥前磁器染付碗の1/2個体である。口径8.8cm、器高4.8cm、底径3.8cmの大きさをもつ。時期は18世紀後半～19世紀。87は肥前磁器染付碗の1/2個体である。口径10.7cm、器高6cm、底径4.5cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。88は肥前磁器染付皿である。1/6が残る。口径31.4cm、器高6.4cm、底径16.1cmの大きさをもつ。内面に楼閣山水文が描かれている。ウルの織がみられる。時期は1690年～1740年代。89は肥前磁器染付皿である。口縁部1/2を欠く。口径14.5cm、器高2.1cm、底径9.3cmの大きさをもつ。底部外面にハリ支痕がみられる。時期は1690年～1740年代。90は肥前磁器染付皿の1/2個体である。口径18.5cm、器高3cm、底径11.2cmの大きさをもつ。底部内面に墨弾き・五弁花文が描かれている。底部外面にはハリ支痕がみられる。時期は1690年～1730年代。91は肥前磁器染付皿の3/4個体である。口径14.5cm、器高2.1cm、底径9cmの大きさをもつ。内面に波、外面に花の文様が描かれている。時期は1690年～1740年代。92は肥前磁器染付紅皿である。1/3～1/2個体が残る。口径6cm、器高2.2cm、底径3cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。93は肥前磁器染付猪口である。口縁部の一部と底部が残る。口径7.9cm、器高5.3cm、底径4.9cmの大きさをもつ。

外面にコンニャク印判の雪輪文が描かれている。底部には「大明年製」が記されている。時期は18世紀前半。94は肥前磁器染付仏飯器のほぼ完形品である。口径5.8cm、器高5.6cm、底径3.4cmの大きさをもつ。外面にコンニャク印判の葉の文様が描かれている。また、貫入が確認できる。時期は1690年～1740年代。95は肥前磁器染付灰落の1/2個体である。口径5.8cm、器高8cm、底径4.7cmの大きさをもつ。外面にコンニャク印判の葉の文様が描かれている。また、貫入が確認できる。時期は1690年～1740年代。96は肥前磁器の白磁で人形又は水滴と想定される破片である。時期は18世紀前半頃。97は色絵の磁器で人形又は水滴と想定される破片である。時期は18世紀。98は肥前磁器の白磁碗で口縁部～体部1/2、底部が残る。口径10.6cm、器高6.1cm、底径4.6cmの大きさをもつ。器面に貫入があり、ウルシの継ぎ痕が確認できる。時期は不明である。99は肥前磁器の白磁小杯で口縁部～体部1/2と底部が残る。口径5.8cm、器高3.9cm、底径2.8cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。100は肥前磁器の白磁紅土の完形品である。口径5.2cm、器高1.5cm、底径2.2cmの大きさをもつ。内面に型押しした文様が施されている。時期は18世紀前半。101～103は肥前陶胎染付碗である。101は口縁部～体部1/2と底部が残る。口径12cm、器高8.5cm、底径5cmの大きさをもつ。外面に貫入がみられる。102は1/2個体である。口径11.2cm、器高7cm、底径5.4cmの大きさをもつ。103は1/2個体である。口径11.2cm、器高7.2cm、底径4.8cmの大きさをもつ。時期はともに18世紀前半。104は陶器碗（抹茶碗）の5/6個体である。口径11.4cm、器高7.2cm、底径5.8cmの大きさをもつ。産地不明。時期は18世紀後半～19世紀。105は肥前系陶器（京焼風陶器）碗である。口縁部～体部1/2と底部が残る。口径9.2cm、器高6.3cm、底径5cmの大きさをもつ。高台内に「清水」の銘款をもつ。時期は1690年～1740年代。106は肥前陶器碗である。1/3～2/3が残る。口径10.8cm、器高7.2cm、底径4.7cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。107は肥前陶器碗のほぼ完形品である。口径10.9cm、器高6.9cm、底径4.7cmの大きさをもつ。貫入がみられる。時期は18世紀前半。108は肥前陶器の刷毛目碗である。3/4が残る。時期は18世紀前。109は陶器鉢である。口縁部～体部1/2と底部が残る。口径16.6cm、器高11.7cm、底径7.2cmの大きさをもつ。産地、時期は不明である。110は肥前陶器鉢である。1/4～1/2が残る。口径34.4cm、器高10.9cm、底径13.2cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。111は肥前陶器鉢である。ほぼ完形品。口径27cm、器高8.1cm、底径10.1cmの大きさをもつ。内面に胎土目痕が7箇所みられる。時期は18世紀前半。112は肥前系陶器鉢である。1/3が残る。口径29cm、器高9.8cm、底径11.9cmの大きさをもつ。内面に刷毛目、外面には釉だれがみられる。また、刷毛目文様が施されている。時期は17世紀末～18世紀前半。113は肥前陶器鉢である。2/3が残る。口径39cm、器高14.1cm、底径13.8cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。114は備前焼瓶の口縁部破片である。口径1.6cm。時期は18世紀～19世紀。115は口頸部を欠く。産地は不明、時期は18世紀。116は肥前陶器挿鉢の口縁部破片である。時期は17世紀～18世紀。117は在地系糸切土師器である。2/3程度が残る。口径9.8cm、器高2.1cm、底径5.2cmの大きさをもつ。時期は18世紀前半。118～124は瓦類である。瓦の分類は「三ノ丸遺跡出土の瓦の分類と編年」（註1）に従った。118は軒平瓦である。瓦当面の左1/2が残る。中心飾りが左側の雄蕊のみ残るが、3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦と考えられる。唐草文は2反転するが蔓草を消失している。軒平瓦E-8類に該当する。119～121は軒丸瓦である。巴文は3点ともに反時計回りで、その尾部は接することなく離れている。119は瓦当面の2/3が残る。珠文は11個残っており、珠文数13個を復元できる。120は瓦当面の1/3が残る。珠文は6個残っている。121は瓦当面の1/2が残る。珠文は10個残っており、珠文数13個を復元できる。122～124は丸瓦の完形品もしくはほぼ完形である。大きさは長さ17.3cm～18.7cm、最大幅11.4cm～13.5cm、厚さ1.5cmである。玉縁は持たない。125は道具瓦である。大きさは長さ8.8cm、幅14.5cm、厚さ1.5cmである。126は治平元寶、初鑄年1064年の北宋銭である。127は紹聖元寶、初鑄年1094年の北宋銭である。

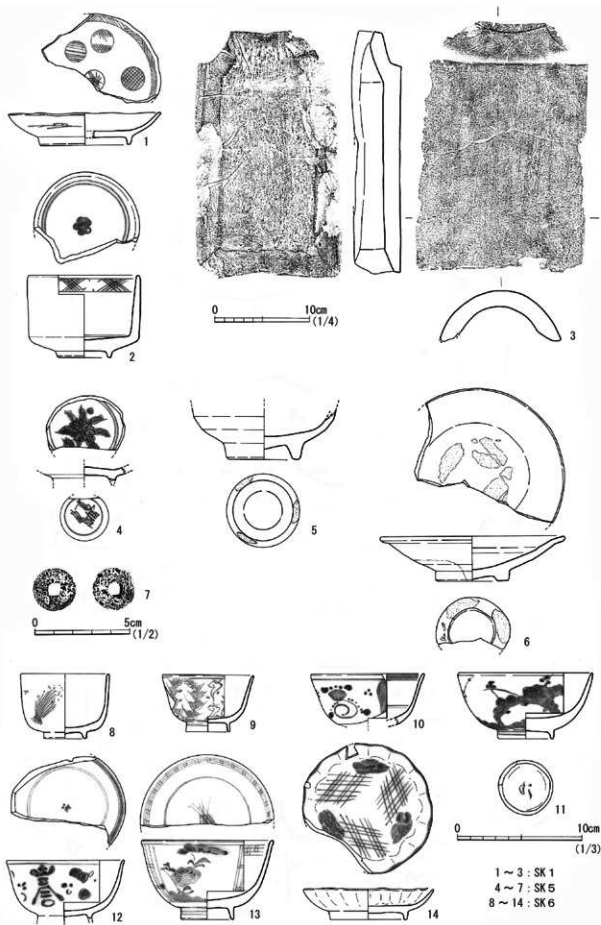
SD2（第23図139～142）139は瀬戸美濃磁器染付皿である。口縁部1/2、底部が残る。口径約

10cm、器高4.8cmの大きさをもつ。時期は19世紀中頃。140は肥前磁器白磁小坏の完形品である。口径5cm、器高3.5cm、底径2.8cmの大きさをもつ。時期は19世紀前半～中頃。141瀬戸美濃系陶器紅皿のほぼ完形品である。口径5cm、器高2.5cm、底径2.8cmの大きさをもつ。内外面に施軸がみられる。時期は19世紀前半～中頃。

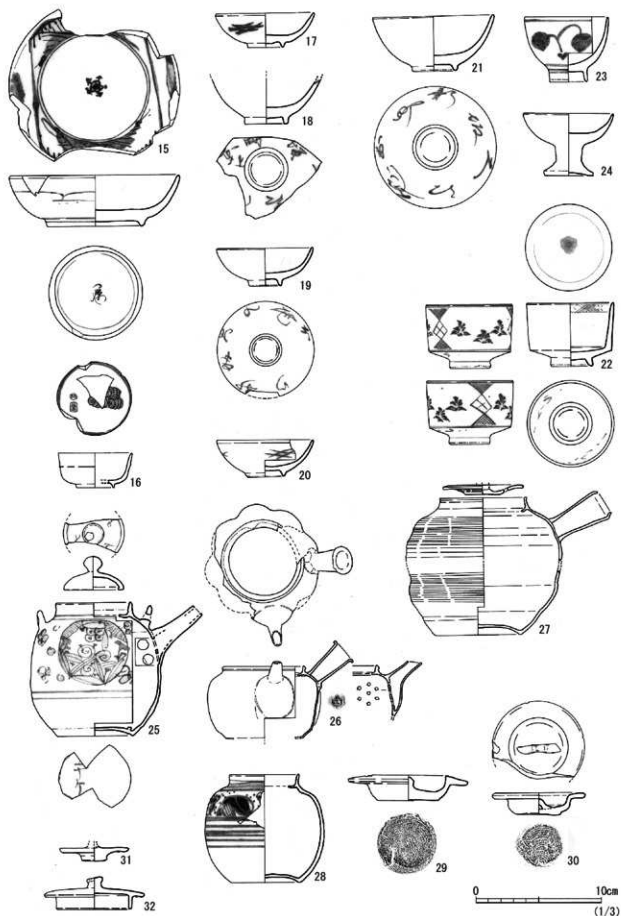
Pit 1 (第23図143～146)。143は関西系陶器鉢である。口縁3/5、底部2/3が残る。口径32.5cm、器高14.5cm、底径13cmの大きさをもつ。時期は19世紀前半～中頃。144は瀬戸美濃系陶器の植木鉢である。1/3個体が残る。口径22.7cm、器高15.9cm、底径13cmの大きさをもつ。時期は19世紀。145・146は瓦質土器の鉢である。145は口縁～底部1/3ほどが残る。口径約24cm、器高8.2cm、底径17.8cmの大きさをもつ。146は口縁1/6を欠く。口径約38cm、器高12.8cm、底径29cmの大きさをもつ。時期はともに19世紀前半～中頃。

表土中等(第22図132～138)132は肥前磁器染付碗である。1/4が残る。口径10.9cm、器高6.1cm、底径4.4cmの大きさをもつ。底部には「大明年製」が記されている。時期は1680年～1740年代。133は肥前磁器染付紅皿の1/2個体である。口径8cm、器高3cm、底径2.6cmの大きさをもつ。外面に「大坂新町お笹紅」が記されている。時期は19世紀前半～中頃。134は青磁瓶である。口縁部～頸部が2/3残る。肥前磁器と思われるが、時期は不明である。

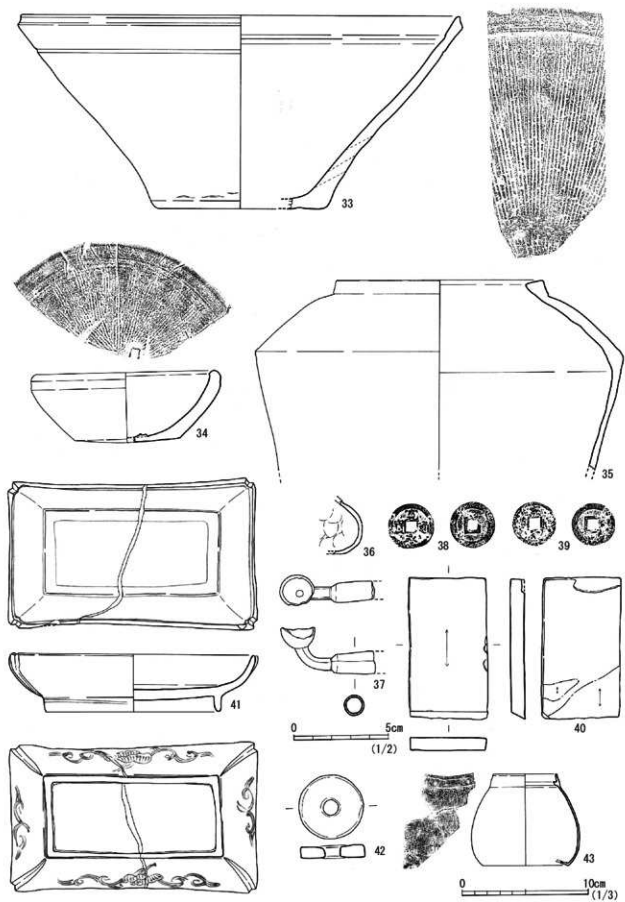
註1 『府内城三ノ丸遺跡』-大分県共同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-
大分県教育委員会 平成5年3月



第11図 SX1、SK5・6(1)出土遺物実測図



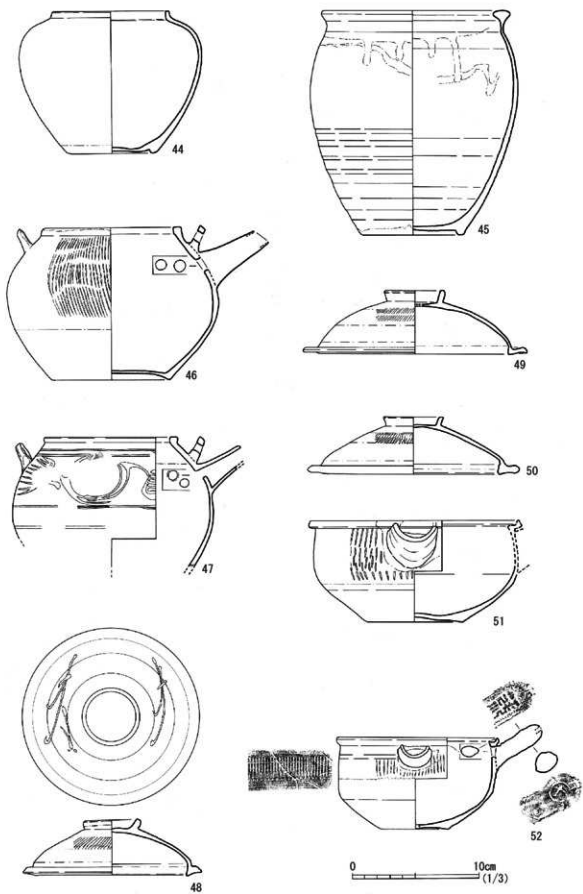
第12図 SX6 出土遺物実測図



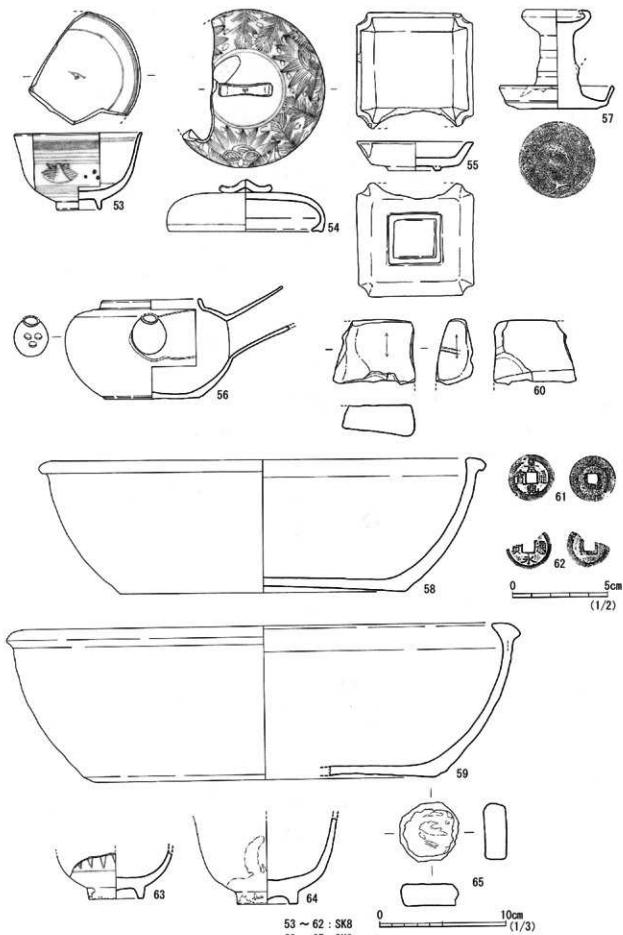
33 ~ 40 : SK 6
41 ~ 43 : SK 7

37 ~ 39 は縮尺 1/2

第13図 SK 6・7 出土遺物実測図

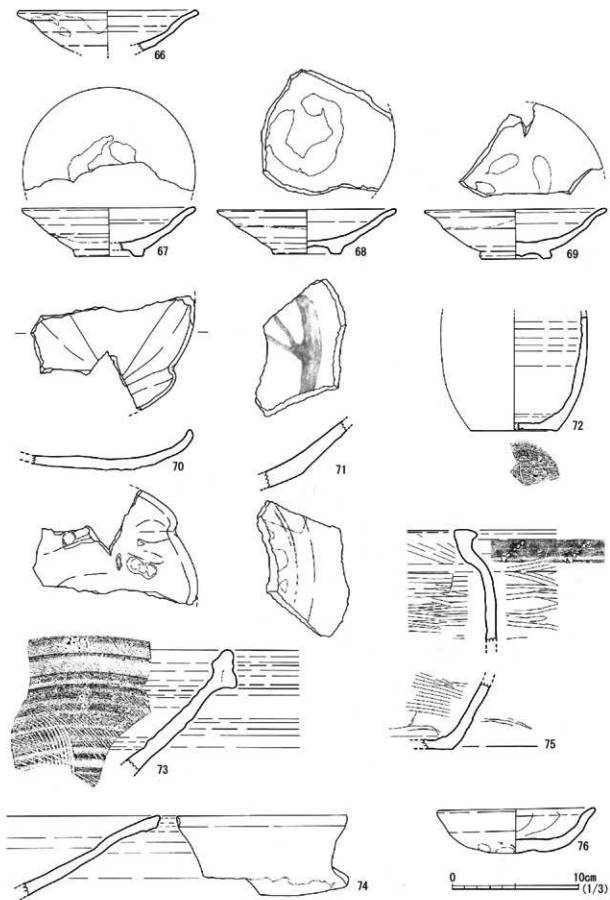


第14图 SK7 出土遺物実測図

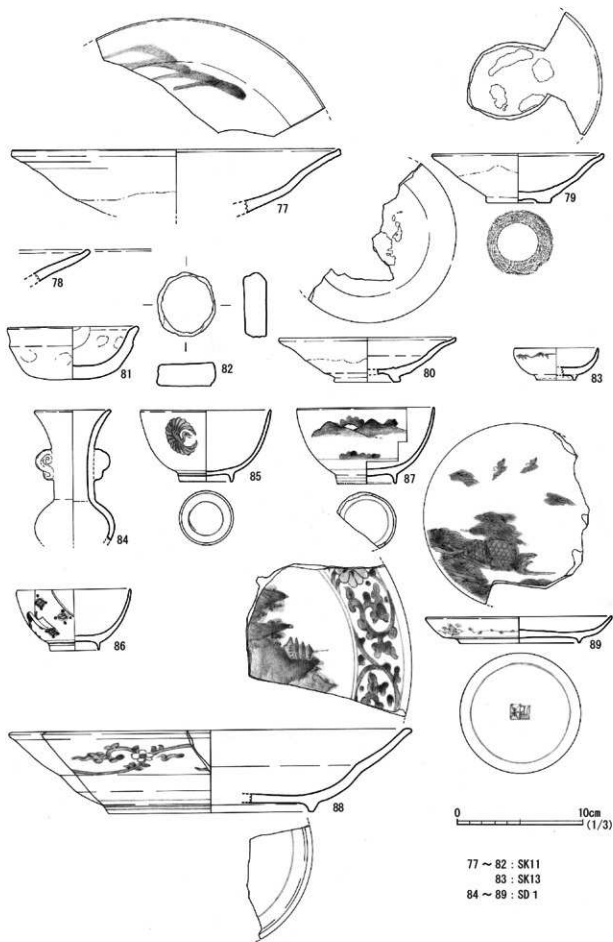


53 ~ 62 : SK8
 63 ~ 65 : SK9

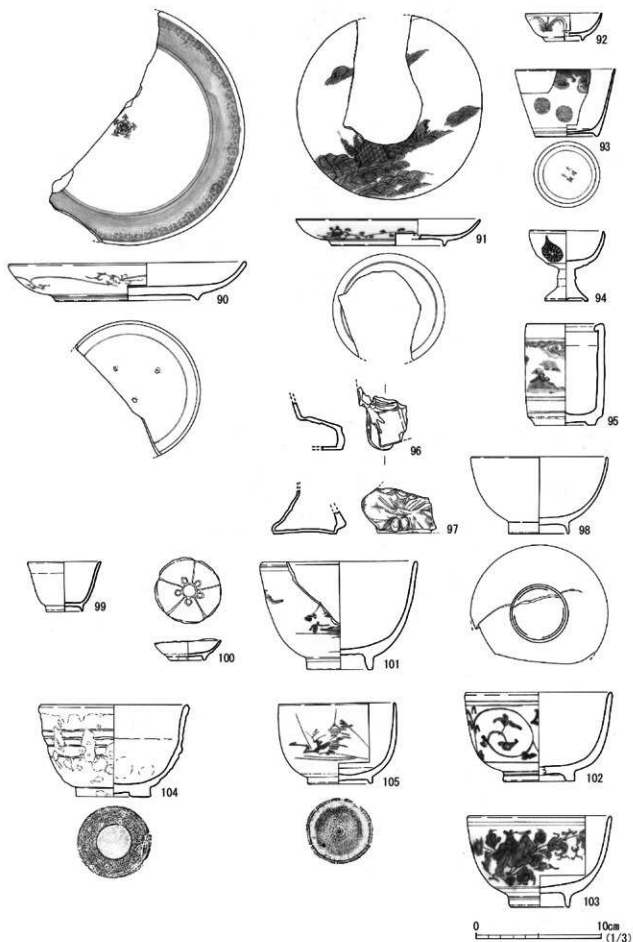
第15图 SK8・9出土遺物実測図



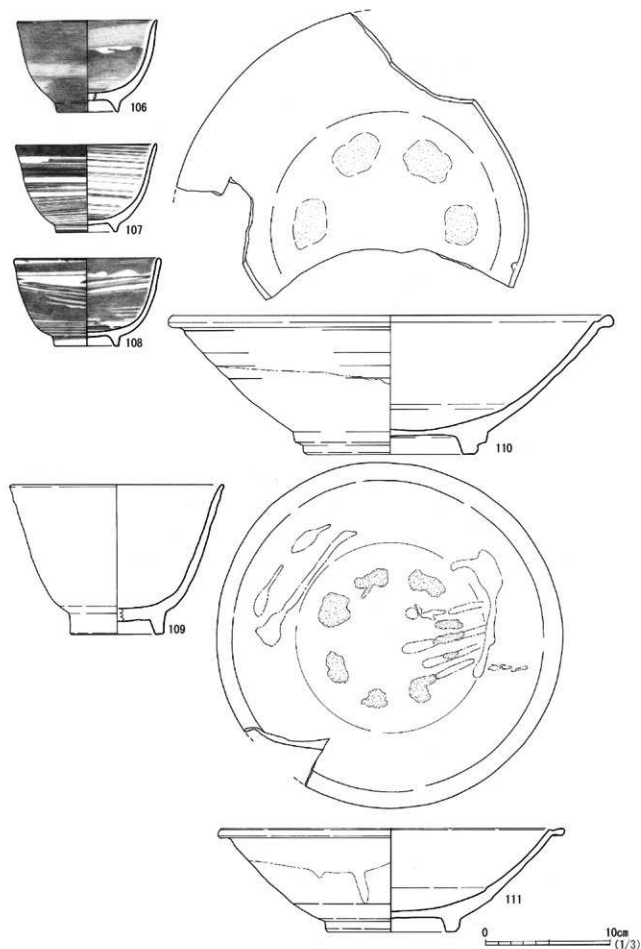
第16図 SK10出土遺物実測図



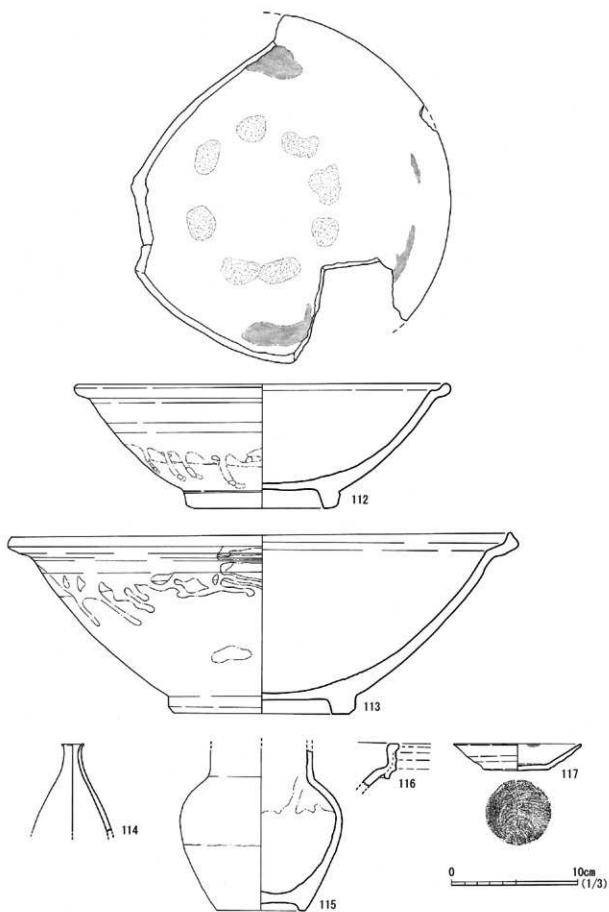
第17図 SK11・13・SD1出土遺物実測図



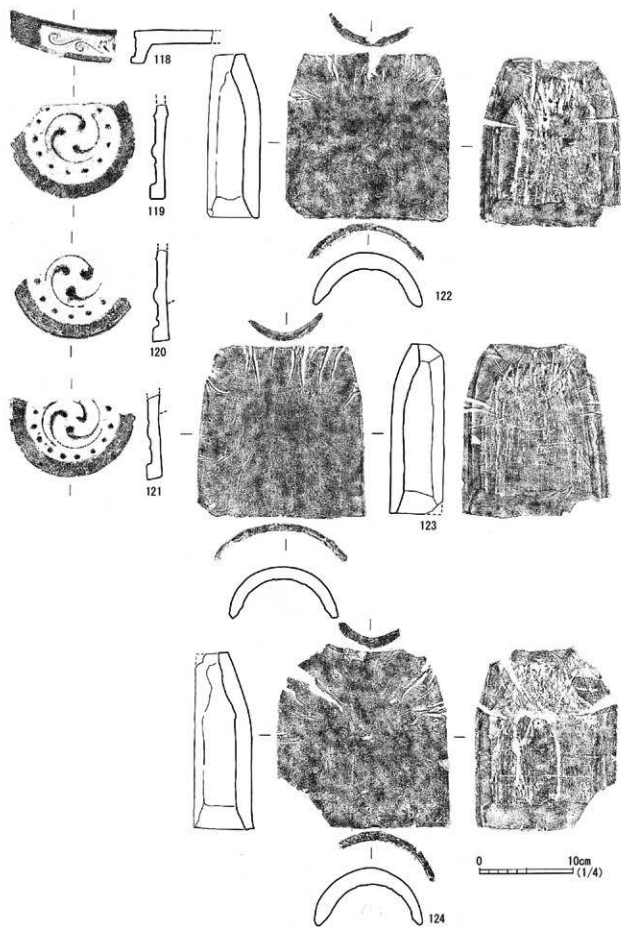
第18图 SD1 出土遺物実測図



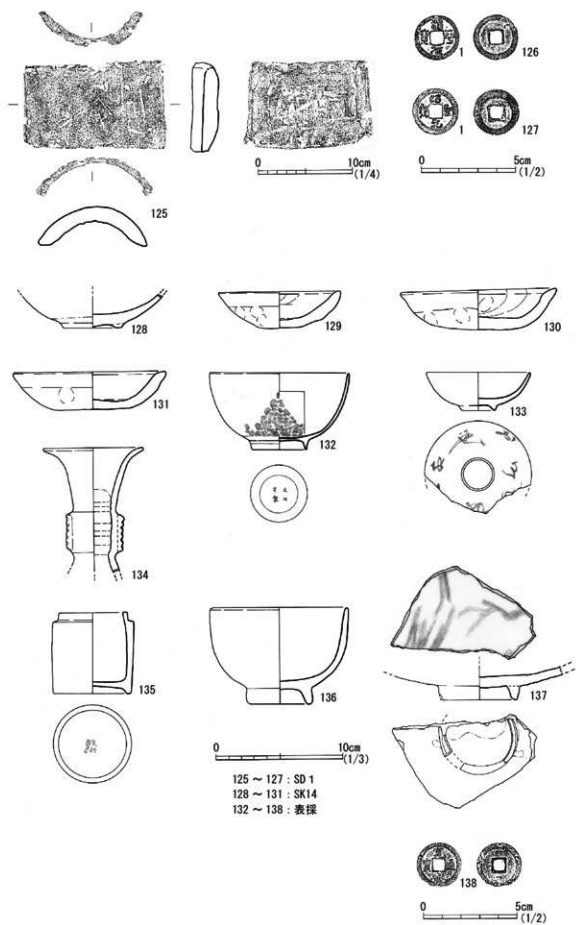
第19図 SD1 出土遺物実測図



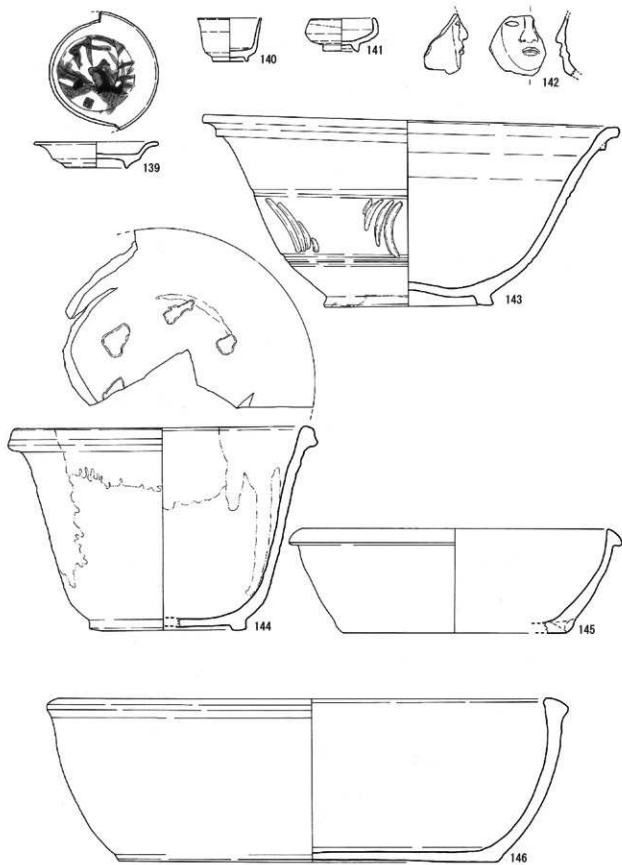
第20图 SD1 出土遺物実測図



第21图 SD1 出土遺物実測図



第22図 SD1、SK14出土遺物実測図



139 ~ 142 : SD 2

143 ~ 146 : Pit 1

第23图 SD 2、Pit 1 出土遺物実測図

第4節 出土遺物について

陶磁器・土器類

今回の調査で出土した遺物について、製作時期別に概観したい。

16世紀後半：今回出土した磁器の中では景德鎮碗(4)が最も古い。

16世紀末～17世紀前半：絵唐津鉢(71)、唐津系播鉢(74)、備前德利(72)の陶器がある。唐津系皿(77)、志野焼鉢(137)は製作年代が1590年～1610年代と特定される。

17世紀前半：肥前系陶器皿(128)、器壁の厚い京都系土師器(76・81)、壺(75)がある。唐津焼皿(66)は製作年代が1600年～1630年、肥前磁器染付碗(63)は製作年代が1630年～1650年代と特定できる。

17世紀末～18世紀前半：肥前系陶器鉢(112)がある。肥前磁器染付皿(88・89・90・91)・染付碗(85)・染付仏飯器(94)・染付灰落(95)、肥前系陶器碗(105)は1690年～1740年代と特定できる。

18世紀前半：肥前磁器染付碗(87)・染付猪口(93)・白磁小杯(99)・白磁紅皿(100)、肥前陶胎染付碗(102)、肥前陶器碗(106)・刷毛目碗(108)・鉢(111)がある。

18世紀後半～19世紀：肥前磁器青磁染付碗(2)・染付紅皿(17)・染付仏飯器(24)、陶器抹茶碗(104)などがある。肥前磁器小杯(23)は18世紀～19世紀の製作時期とみられる。

19世紀前半～中頃：磁器では肥前磁器染付碗(8)・染付碗(9)・染付皿(14)・染付皿(15)・染付小杯(16)・染付紅皿(19)・染付紅皿(21)・染付筒形碗(22)・白磁小杯(140)・染付段重蓋(54)・染付角皿(41)がある。陶器では関西系陶器の急須(25)・土瓶(28・31)・行平鍋(52)がある。瓦質土器では鉢(145)がみられる。

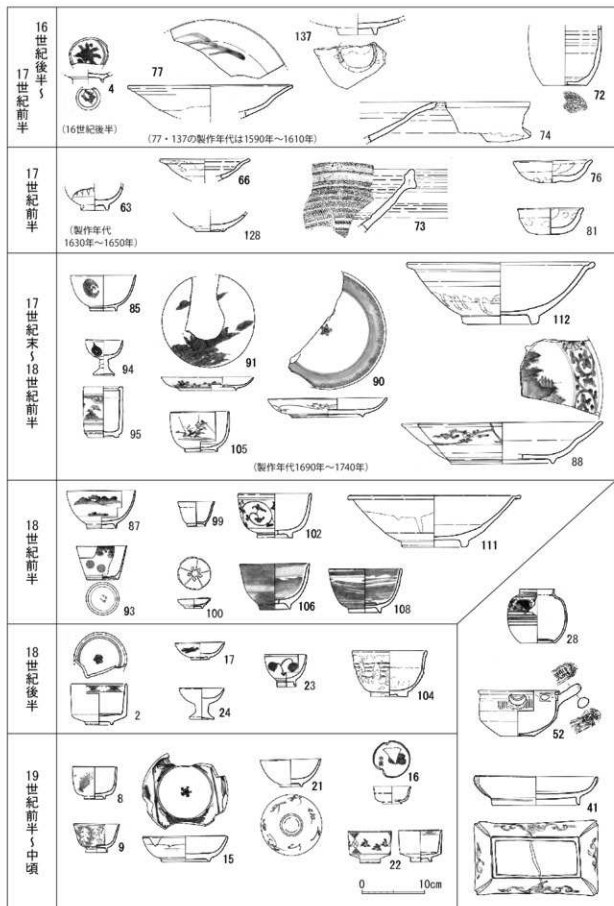
瓦類

出土した瓦類の量はさほど多くない。建物が焼失し、その後の整地等で残らなかったと考えられる。軒平瓦(118)は瓦当面の左1/2が残る。中心飾りは残存する左側の雄蕊の形状から3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦と考えられる。2反転の唐草文は蔓草を伴わない形状であり、軒平瓦E-8類に該当する。時期は、18世紀中頃に比定される(註1)軒丸瓦は119～121の3点がある。巴文は3点ともに反時計回りで、その尾部は長い接することなく離れている。119は瓦当面の2/3が残り珠文は11個を確認した。120は瓦当面の1/3が残る。珠文は6個残っており、珠文数13個を復元できる。121は瓦当面の1/2が残る。珠文は10個残っている。残存する文様から復元すると、119・120はTK類に該当すると考えられる。121はTK類に近いと思われる。

銭貨

銭貨は8出土したが、3点は寛永通寶で1は新寛永、2は古寛永である。2点は劣化が著しく種類を特定できなかった。また、61はベトナム、126・127は北宋で铸造された銭である。

註1. 当センター吉田寛氏教示



第24図 陶磁器・土器類編年図

表2 瓦類観察表

挿図 番号	遺物 番号	遺構名	種類	寸法 (cm)						残存率	備考
				部位	長さ	幅	厚さ	重量	厚さ		
11	3	SK 1	丸瓦	長さ	25.5	幅	12.4	厚さ	1.6	完形	コビキB
21	118	SD 1	丸瓦	長さ	11.1	幅	3.3	厚さ	1.4	瓦当2/5残	
21	119	SD 1	軒丸瓦	長さ		幅	13.0	厚さ		瓦当4/5残	巴左回り 珠文11個 (残存)
21	120	SD 1	丸瓦	長さ	12.0	幅	9.6+ α	厚さ	1.0	1/4残	巴文 珠文6個(残存)
21	121	SD 1	丸瓦	長さ	13.0	幅	9.0+ α	厚さ	1.2	1/2残	巴文 珠文10個(残存)
21	122	SD 1	丸瓦	長さ	17.3	幅	11.5	厚さ	1.7	ほぼ完形	
21	123	SD 1	丸瓦	長さ	17.8	幅	13.5	厚さ	1.3	完形	
21	124	SD 1	丸瓦	長さ	18.7	幅	11.4	厚さ	1.7	ほぼ完形	
22	125	SD 1	道具瓦	長さ	8.8	幅	7.4	厚さ	1.5	完形	

表3 土製品観察表

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	残存率	備考
13	36	SK 6	土鈴	4.2+ α		0.3		破片	
15	65	SK 9	メンコ	4.5	4.6	1.7	42.2		円盤状瓦製品
17	82	SK11	メンコ	5.2	4.6	1.9			円盤状瓦製品
23	142	SD 2	人形	4.8+ α	4.5+ α	0.3 ~ 0.7		破片	博多人形か・19Cか

表4 石製品観察表

挿図番号	遺物番号	遺構	層位	種類	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	備考
13	40	SK 6	上層	砥石	泥岩	11.0	6.0	1.1	166.2	
15	60	SK 8	下層	砥石	天草石	4.9+ α	5.8+ α	1.5 ~ 2.3	109.3	

表5 金属製品観察表

挿図番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
13	37	SK 6	煙管	5.0+ α	1.6	1.6	7.7	銅製品

表6 銅銭観察表

挿図番号	遺物番号	遺構名	銭貨名	国・王朝名	初鑄年	重さ (g)	直径 (cm)	書体	備考
11	7	SK 5				1.8	2.3		不鮮明
13	38	SK 6	寛永通寶	日本	1636 ~ 1659	3.7	2.4		古寛永
13	39	SK 6				2.4	2.3		
15	61	SK 8	景興通寶	ベトナム	1740	3.3	2.4		
15	62	SK 8	寛永通寶	日本	1636 ~ 1659	1.4	2.3		古寛永
22	126	SD 1	治平元寶	北宋	1064	3.3	2.4	篆書	
22	127	SD 1	紹聖元寶	北宋	1094	3.0	2.4	行書	
22	138	調査区西壁 トレンチ	寛永通寶	日本	1697 ~ 1747 1767 ~ 1781	2.8	2.3		新寛永 (3期)

第4章 近世府内城下町の火災について

はじめに

府内城下町は、本報告書4ページに記述されているように、17世紀初頭、福原直高・竹中重利の時代に、府内城を内堀・中堀・外堀の3つの堀が囲む近世城郭都市として建設された。その後、竹中重義・日根野吉明の時代を経て、万治元年(1658)に入封した松平忠昭以降、大給松平氏の城下町として明治4年(1871)の廃藩置県を迎えることになった。

埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下町」に関する大分県教育委員会及び大分市教育委員会による発掘調査において、数か所の調査地区から近世の火災に伴う火災処理土坑が確認されている。本調査地区においても、焼土や炭灰を主体とする堆積土を伴う複数の土坑が確認され、火災処理土坑の痕跡と考えられている。

近世の府内城下町では、たびたび火災が発生し類焼による被害も多かった。人々は、被災するたびに焼土や炭灰等を土坑に埋め、新たな生活を築いていったと考えられる。

本章では、本調査地区を含む埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下町」の発掘調査において18世紀の火災処理土坑が多く確認されていることから、「寛保3年の大火」を中心に府内城下町における火災について概観する。

第1節 府内城下町及び周辺の火災

18世紀から19世紀にかけて府内城下町及び周辺で発生した火災について、「府内藩記録」の記事を中心に整理すると、表7の通りである。

火災の発生時期をみると、26件中の24件(92%)が11月から4月にかけての冬から春の時期に集中している。また、おおよその発生時刻が記されている火災をみると、午後8時頃から午前4時頃の夜間に60%、午後2時頃から午後4時頃の昼間に33%となっている。寒い時期の夜間に暖を取るための火から発生した火災が多いといえる。

被害軒数が記されている火災の70%以上が100軒を超える被害となっており、一旦火の手が上がると鎮火

表7 18世紀から19世紀にかけて府内城下町及び周辺で発生した火災

年	西暦	月	日	出火元	主な被害
元禄7	1694	11	1	西町	家232軒、寺2
元禄11	1698	4	22	西新町	家38軒
正徳元	1711	3	21	生石村	家87軒、馬屋57、灰屋16、土蔵13、穀屋15
享保17	1732	11		唐人町	(4町程度)
享保19	1734	正	14	堀川町	家608軒、倉13、死者9
元文元	1736	7	21	中上市町	家91軒、納屋8、室家1、馬屋9、穀屋2
寛保3	1743	4	7	下柳町	本丸天守、二ノ丸、三ノ丸、家中71軒、土蔵12、寺2、町家1079軒、土蔵37、死者3、馬1
宝暦6	1756	閏11	27	後小路	家109軒、寺1、宮1
宝暦9	1759	9	29	萩原村	家142軒、納屋8、馬屋23
明和8	1771	2	2	下柳町	家606軒、土蔵25、納屋67、馬屋14
安永2	1773	3	4	生石村	(生石兩個半分、駄原表側、王子宮前まで両側、真町残らず)
安永8	1779	正	29	下柳町	家100軒余
天明3	1783	12	19	東上市町	(17町)
天明4	1784	12	1	西新町	家中77軒、町家524軒、納屋60、土蔵14、馬屋6、堂2、室屋1
寛政3	1791	正	2	古川町	家35軒、納屋1、土蔵13、室屋1
寛政3	1791	12	19	竹町	家301軒、納屋43、土蔵4、空屋3、馬屋8、室屋2、死者1
享和元	1801	12	15	勢家町	家114軒、納屋58、土蔵19、寺1
文化7	1810	12	15	下柳町	家187軒
文化9	1812	12	19	沖ノ浜町	家133軒、徒士足軽4軒
文政元	1818	12	21	天神町	(天神町平方、後小路・古川町残らず)
文政10	1827	11	11	萩原村	家241軒
天保5	1834	3	30	鍛冶屋町	家34軒
天保9	1838	2	21	古国府村	家43軒、死者1
天保9	1838	12	23	生石村	家647軒、土蔵199、寺1、庵1
安政4	1857	3		塗師町	家27軒
安政4	1857	3		田町	家37軒

「府内藩記録」より。

させることが難しかった状況を示している。

中でも、府内城の天守をはじめ城郭施設や城下町の大半を焼き尽くしたといわれる寛保3年（1743）の大火においては、町屋だけでも1,000軒を超える被害となっている。

第2節 府内城下町の概要

府内城下町は、どのような町で、どれくらいの人が生活していたのであろうか。

元禄7年（1694）に府内城下町を訪れた貝原益軒は、その時の印象を「豊国紀行」に次のように描写している。

府内の町の南西にほり（堀）あり、城の要害なり、東北の方は海なり、城は町の東北の海の方にあり、顔る大なり、天守あり、城の入口三所あり、町も顔るひろし、万の売り物備れり

益軒が「顔る大なり」と記したのは、2万石の城としては大きく感じたのであろう。益軒が府内城下町で特に印象深かったのは、「町も顔るひろし、万の売り物備れり」と記しているように、活気があり多くの商品が取引され繁栄していたことである。

このような府内城下町の三ノ丸の外側、中堀と外堀に挟まれた町人町部分について、「豊府指南」は、次のように記している。

町数四拾八ヶ所 此の内式丁もこれあり、又巷丁もこれあり、或いは三拾間余りこれあり候、大概六十間の積り、四拾丁余これあり候

府内城下町の町人町部分には48区画あり、1区画で1町名となっていたり、2区画で1町名となっていたりし、区画の長さはおおよそ60間となっているが、30間の区画もあったとのことである。

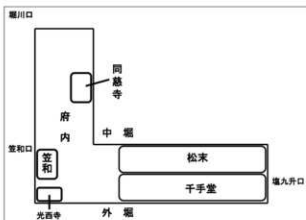
このような府内城下町の町人町部分は、「元禄郷帳」などの公式記録では、府内・笠和・千手堂・松末・同慈寺の5町として記されている。府内藩は、笠和・同慈寺をひとつくりにして府内・千手堂・松末とともに4つのまとまりとして4人の庄屋（府内四庄屋）を置いたため、曲輪内を「町四ヶ所」と称するようになった。但し、曲輪内ではあるが、堀川町・船頭町・網町は勢家村庄屋の支配下に入っていた。

18世紀の府内城下町に住んでいた人口について、「豊府指南」に記されている宝永7年（1710）の府内城下町（御曲輪内）の町人町家数や人口を整理すると、表8の通りである。「町四ヶ所」として府内城下町（御曲輪内）の町人町家数や男女別の人口等が集計されている。「豊府指南」では笠和・同慈寺の家数が欠落しているが、合計が記されているので表には計算した数値を入れている。

表8 宝永7年（1710）の府内城下町（御曲輪内）の人口

町名		家数 (軒)	人数(人)		
			男	女	計
町 四 ヶ 所	府内	670	1870	1616	3486
	笠和・同慈寺	116	273	237	510
	松末	231	263	218	481
	千手堂	141	311	289	600
その他 (勢家の内)	堀川	52	156	144	300
	船頭・網	10	20	17	37
	計	1220	2893	2521	5414

「豊府指南」より



第25図 府内城下町の町人町部分の概略図

府内城下町（御曲輪内）の町人町家数や男女別の人口等が集計されている。「豊府指南」では笠和・同慈寺の家数が欠落しているが、合計が記されているので表には計算した数値を入れている。

府内城下町（御曲輪内）の町人町には、家が1,200軒程度あり、5,400人程度が住んで生活していたということである。町人町全体を平均すると、1軒に4.4人程が生活していたことになる。町人町の西

側の大半を範囲としていた「府内」が、家数の55.0%、人口の64.4%を占めていた。また、「府内」が1軒あたりの人数の割合が5.2人と一番多く、「松末」が2.1人と一番少なくなっている。

第3節 寛保3年の大火

寛保3年(1743)4月7日、府内城下町の下柳町の市兵衛宅から出火した。火事の概要について、「府内藩記録」(甲66)には次のように記されている。

七日。曇天。

一、今昼八ッ時(午後二時頃)、下柳町より出火、西北風烈しく、大火に及ぶ。御城、御家中、御町、塩九升町迄類焼。……夜四ッ時分(午後10時頃)火鎮る。

火の手は、北西の風にあおられて南東方向に広がり町家を燃やし、中堀を越えて三ノ丸の武家屋敷や浄安寺・福寿院などに広がり、さらに内堀を越えて城中に及んだ。この火事により、本丸天守も焼け落ちた。大まかな被害状況は、第26図の通りである。斜線部分が類焼した地域である。類焼を免れたのは、町人町の北西部分の一部だけである。

中堀より内側の地域の被害状況について、「豊府指南」は次のように記している。

三ノ丸侍屋敷残らず焼失。浄安寺・福寿院共

二。セツ半時、西ノ丸二重櫓二火移り、本丸書院、居間、玄間、天守、北大門、冠木門、二重櫓、東大門、二階広間、多門鐘櫓、本丸口櫓門、小廊下橋、土蔵、菱櫓冠木門、山里廊下橋、東ノ丸座敷廻り残らず、三階櫓、長角櫓、涼所、玄間前平櫓、同所冠木門、玄間、広間、大書院上櫓、小書院中奥居間、台所、三ノ丸西口二重櫓、同所門番所、里郷倉、中郷倉、侍屋敷、寺院共七十一軒、家中土蔵十二焼失。長池蔵とも焼失。

また、町人町地域の被害状況について「豊府指南」には次のように記されている。

寛保三癸亥年四月七日焼失町数四拾二丁、内一丁は門外。但寺式ヶ所、浄龍寺老ヶ所、塔頭式ヶ寺。善巧寺。長浜明神本社並扣殿共。惣家数千七拾九軒。外に土蔵三拾七ヶ所。死人三人。死馬老走。

町人町地域の1,079軒が焼失し、37ヶ所の土蔵も焼失している。宝永7年(1710)の府内城下町(御曲輪内)の町人町家数が1,220軒だったことを考えると、90%近くの家が類焼したことになる。ただ、火災発生が昼間だったこともあり、死者は3人であった。

府内藩は、「寛保3年の大火」からの復旧に向けて、近隣の村から支援物資を拠出させている。例えば、東五ヶ村(牧村、萩原村、花津留村、中津留村、今津留村)の一つである萩原村は、次のように報告している(「府内藩記録」甲65)。

覚

一、蠟燭百挺 但八匁掛より拾式匁迄

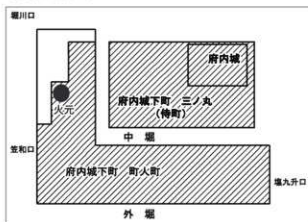
一、油式斗 内巻斗ツ、 次兵衛・権四郎

一、灯籠拾壹振り

一、あんどん九ツ 市兵衛

一、御前味噌八貫目

右の通り、先月七日夜より差し上げ置き申し候分、此の如く御座候、以上



第26図 寛保3年の大火による被災地域

亥閏四月

萩原村庄屋 久左衛門

萩原村からは、このように蠟燭や油、灯籠、行燈等の明かりと食料として味噌が拠出されていた。同様に、西三ヶ村(勢家町、駄原村(駄原村枝村の長水を含む)、生石村)からも、丸行燈、角行燈、蠟燭、油とともに味噌8貫200目、白米1石6升と七鳥筵21束が拠出されていた。藩から村高等に応じて拠出量が指示されたわけではなく、各村で出せる物資を出したということであろう。

また、火事の翌日から後片付けのための人夫も近隣の村から動員されている。ある程度の片付けが終了した1ヶ月半後の閏4月22日に、東五ヶ村と西三ヶ村から次のように報告されている(『府内藩記録』甲65)。

覚

一、人夫四百七拾人程 東五ヶ村

右は人夫先月八日より十九日迄の内、指し出し申し候間、書付指し上げ申し候、以上

亥閏四月廿二日

東五ヶ村庄屋共 印形

覚

一、人夫貳百五拾人程 西三ヶ村

右は人夫先月七日出火以後同廿日迄の内、御用に差し出し申し候、以上

亥閏四月廿二日

西三ヶ村庄屋共 印形

東五ヶ村と西三ヶ村から延べ720人程度の人夫が動員されたのである。この片付けの際に、火災処理土坑が掘られ、焼土や炭灰等の様々なものが処理されたと考えられる。

このように火災からの復興に向けて取り組んでいる最中に、近隣の諸藩からも支援が寄せられている。

閏4月16日に、日出藩主木下俊能から見舞いの使者として常川十左衛門が来ている(『府内藩記録』甲66)。見舞状には、次のように記されていた。

先頃、御在所出火の処、御城中御類焼の段承知致し、気の毒千万存じ候、御見廻りとして使者を以て申し達し候に付き、目録の通り進覽致し候

日出藩からは、「鯨入箱肴壹ツ、松丸太百本、竹百束」等が届けられている。府内藩は、使者に対して堀川町の松屋吉郎兵衛宅にて一汁五菜の料理を出している。

この後、5月15日に白杵藩から「松板百坪、切付五口 但シ箱入」、5月17日に杵築藩から「板千枚」、6月9日に岡藩から「切付十口、鯛一箱」、6月11日に森藩から「七鳥筵三百枚」、6月16日に中津藩から「備後表五百枚、干鯛壹折」、7月14日に佐伯藩から「干鯛一箱、手綱十筋」、8月26日に小倉藩から「切付廿五掛、粕漬鮑一桶」が見舞いの品として届けられている(『府内藩記録』甲66)。このように豊後・豊前の各藩から見舞いが寄せられ、その都度、府内藩は使者に対して料理等によるもてなしを行っている。

復興対策として、焼失した家屋の再建も大きな問題であった。府内藩は、4月15日、屋敷が焼失した藩士に、「小屋掛け」や秋に予定されている参勤交代の御供の「道中支度」のため、「小納戸米」の一部を配布している。

また、府内藩は、天守をはじめとする城郭施設が被災したこともあり、火災後すぐに幕府に報告するとともに、復興のための資金の拝借を申請している。その後「御城、侍屋鋪、其の外数多焼失に付き、御拝借金貳千両仰せ付けられ候」(『府内藩記録』甲66)との連絡が届き、閏4月21日には御礼言上の使者を江戸に派遣している。この拝借金が屋敷建築費として藩士に貸し付けられたのは、8月29日であった(『府内藩記録』甲66)。御近習・御中小姓に「銀三百目」、御代官に「銀二百目」等、役職や知行・扶持に応じて貸付額が決められていた。

天守をはじめとする城郭施設を焼き尽くしたことだけでなく、町人町の大半が焼失しているというこ

とからも、復旧に大変な資金と労力、時間がかかり、府内藩に大きくのしかかった火災被害であった。

おわりに

以上、「寛保3年の大火」を中心に、府内藩城下町の火災について概観した。寛保3年以降も、表7に整理したように火災は発生している。しかし、城下町の大半を焼き尽くし被害が1,000軒を超えるような火災は発生していない。城下町における防火意識を高める上で、「寛保3年の大火」は大きな契機となったと考えられる。天明6年（1786）には城下出火の際の動員体制が決められ、寛政5年（1793）には火災時の動員・詰場・心得・火災道具等が定められている。火災発生のたびに府内城下町の防火体制が整備されていった状況を確認することができる。

【付記】史料閲覧に際して大分県立先哲史料館・大分県立図書館にお世話になった。記して謝意を表したい。

第5章 総括

今回の調査は本丸と堀を隔てた南側の武家屋敷が対象になった。当時、この場所には四家の屋敷が存在したことが絵図から想定されていた。

調査の結果を整理すると、まず武家屋敷の建物については、その痕跡を確認することはできなかった。後世の造成等によって近世の生活面が削平されたためと考えられる。

確認できた遺構は、土坑 (SK) 14、落込み (SX) 1、柱穴 (Pit) 1、溝状遺構 (SD) 5である。このうち土坑は11基が近世、3基は近代であった。遺構の時期を出土遺物などからみる。

1600年～1630年代：SK10・14、今回の調査では最も古い。

17世紀前半～中頃：SK9

17世紀中頃：SK11

17世紀末～18世紀前半：SD1

18世紀後半：SK13、SX1

1810年～1820年代：Pit1

1858年～：SD2

幕末～：SK4・5・7

以上の推移が考えられた。

遺構の性格についてみると、土坑は主に廃棄土坑（ごみ穴）と考えた。このうち、土坑内の堆積土中に被熱した遺物や焼土・炭をもつ例を上げると、SK5・9・10が二次被熱した陶器類、SK7・11・SD1はススの付着した遺物が出土している。焼土等が土坑内に堆積した例は、SK4・5がある。ともに焼土と炭灰を主体とする堆積土を確認しており、火災処理土坑と想定できる。溝状遺構ではSD1が上層に焼土・炭灰を含む堆積土が確認しており、溝の機能を停止した後に堆積あるいは埋土したものであろう。

武家屋敷の建物痕跡は確認できなかったが、SD1は区画を示す遺構の可能性がある。この溝は屋敷地の西側を南北に伸びる区画溝と想定でき、絵図で示された山田家と井川家の境の可能性もある。

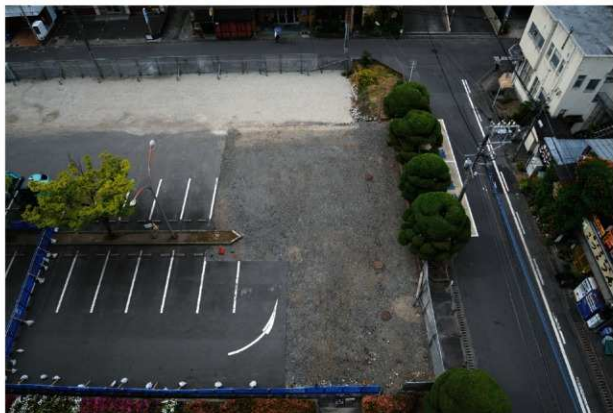
屋敷の区画に関しては、大分市教育委員会が発掘調査を行った第8次調査と第29次調査で所見が得られている。第8次調査では、調査区北部に位置する東西方向溝が武家屋敷境とほぼ一致すると考えられ、区画施設と想定される。規模は12m、幅4.2mの方形を呈し、深さは約1mである。一方府内城の西部にあたる第29次調査では屋敷の境に礎石列が確認されている。西の岡本家と東の神谷（屋）家の境とされており、幕末の上級家臣の屋敷区画を示す好例といえる。今回調査を実施したSD1と比較すると、至近地に位置する第29次調査例に近い形態といえる。屋敷区画の構造や類型を考える上で貴重な知見を得ることができた。

出土遺物は16世紀初頭から19世紀中頃までの陶磁器・土器類、瓦類が出土している。その様相から、江戸時代初頭から幕末までの継続的な武家の生活の一面を窺うことができた。

さらに、「第4章近世府内城内下町の火災について」では、「府内藩記録」、「豊府指南」などの記録をもとに江戸時代を通した火災の履歴、特に寛保3年の火災について詳細に言及されている。これにより、出火原因、被害状況、周辺各藩・幕府の支援など当時の具体的な様子が浮かび上がってくる。文献に記録された内容の分析と検討は埋蔵文化財の発掘調査と軌を一にするものであり、今後の調査においても重要と考える。

写 真 图 版

※遺物写真の番号は遺物実測図の番号と共通



遺跡全景（北方向から）－調査前－



遺跡全景（北上方向から）－完掘時－



土層1（東方向から）－西壁－



中央部



北部



南端部



南部



土層2（西方向から）－東壁－



北部



西壁中央部の焼土層



土層2（版築）



北部半部



SK 1 (北方向から)



SK 1 完掘状態 (北方向から)



SK 2 (南方向から)



SK 4・5 (南方向から)



SK 5・SX 1 (南方向から)



SK 6 上層の遺物出土状態
(南方向から)



SK 6 底面の遺物出土状態
(南方向から)



SK 6 土層 A-A' (南方向から)



SK 8 (南方向から)



SK 10 (南方向から)



SK12 (南方方向から)



SK14 (北方方向から)



SD1 (北方方向から)



Pit1 (南方方向から)



Pit1 (南方方向から)



SD1 南端部
(南方方向から)



SD1 北端部 (南方方向から)



SD1 土層 A'-A (北方方向から)



調査区南半部



SD2 (南方向から)



SD5 (西方向から)



西辺北部の遺物135出土状態 (北方向から)



SD5 (東方向から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



25



26



27



28



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



47



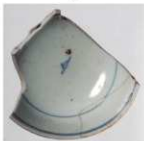
52



43



48



56



44



49



53



57



45



50



54



58



46



51



55



59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



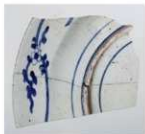
86



87



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



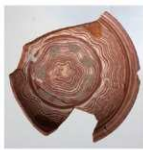
103



104



108



112



114



104



108



113



115



105



109



117



116



105



110



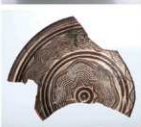
117



118



106



110



119



107



111



120





121



125



122



126



127



123



128



129



124



130



131



132



133



134



135



136



137



142



138



139



140



141



143



144



145



146

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふないじょうさんのまるいせき よん
書名	府内城三ノ丸遺跡Ⅳ
副書名	大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	小林昭彦
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1-61
発行年月日	2019（平成31）年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふないじょう じやうかまち 府内城・城下町	あいたけふちあいのたし ふないじょうさん丸いせき 大分県大分市府内町三丁目	201	41	33° 14' 17	131° 30' 40	2017.6.5 ～ 2017.6.29	292㎡	県庁施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城・城下町	城下町	近世	土坑・溝	陶磁器・土器類	
要約	<p>今回の発掘調査地点は三ノ丸遺跡の南部東寄りにあたり、四家の武家屋敷があったと想定される。後世の造成を受けており、当時の建物を復元することは困難であった。遺構は土坑、溝などであった。特にSD1は屋敷区画に関する遺構と想定した。出土遺物には16世紀から19世紀中頃までの陶磁器・土器類を確認した。江戸時代当初から幕末までの継続的な武家の生活の一面と屋敷区画に関する知見を得ることができた。</p>				

府内城三ノ丸遺跡Ⅳ

—大分県庁別館受変電棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第5集

2019年3月29日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61
TEL 097-552-0077

印刷 佐伯印刷株式会社
〒870-0844 大分県大分市古国府1155-1
TEL 097-543-1211

